

## &lt; 論 説 &gt;

## ベンジャミン・フランクリンと産業的啓蒙

—幸福のための改善—

山 本 通

## 目 次

- はじめに：問題の提起
- 1 フランクリンの生涯
    - i) 修業時代
    - ii) 印刷所経営の時代
    - iii) 地域的指導者から国際的文化人へ
  - 2 フランクリンにおける宗教と道徳
    - i) 18世紀英米の宗教
    - ii) フランクリンの宗教論
    - iii) フランクリンの道徳論
  - 3 ベンジャミン・フランクリンの産業的啓蒙主義
    - i) 18世紀啓蒙とフランクリン
    - ii) 暦, 新聞, パンフレット
    - iii) アソシエーションと公共事業
    - iv) 科学と教育：産業的啓蒙
- おわりに：フランクリンと近代社会の成立

## はじめに：問題の提起

マックス・ヴェーバーは、有名な論文「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神<sup>(1)</sup>」において、近代以前の資本主義には「資本主義の精神」が欠けていたが、近代の資本主義は「資本主義の精神」の担い手たちによって成立した、と述べた。ヴェーバーは「資本主義の精神」を「ほとんど古典的と言いうるほど純粋に包含している」ものとして、ベンジャミン・フランクリンが書いたパンフレット『若き商工業者への助言<sup>(2)</sup>』の内容を紹介する。そこには、「時間は貨幣だということを忘れてはいけない」「信用は貨幣だということを忘れてはいけない」「貨幣は繁殖し子を産むものだということを忘れてはいけない」「支払いの良い者は他人の財布に力をもつことができる」「信用に影響を及ぼすことは、どんなに些細なおこないでも注意しなければいけない」「長きにわたって支出も収入も正確に記帳しておくのがよい」といった格言や処世術が書かれている。

それは素直に読めば、「格言ないし忠告の集成」である。しかしヴェーバーは、これを独特の

観点から読み込んで、単なる処世術や格言ではなく、全体として一つの「エートス」つまり「倫理的な色彩を持つ生活の原則」を示すものだ、と解釈する。ヴェーバーによれば、ここには「自分の資本を増加させることを自己目的と考えるのが各人の義務だ、という思想」が示されている。そしてこの倫理の「一切の自然的な享楽を厳しく斥けてひたむきに貨幣を獲得しようとする努力は、幸福主義や快樂主義などの観点を全く帯びていず、純粹に自己目的と考えられているために、個々人の幸福や利益といったものに対立して、ともかく、まったく超越的な、また、およそ非合理的なものとして立ち現われている」と断定する。「営利は人生の目的と考えられ、人間が物質的生活の欲求を満たすための手段とは考えられていない」。これは「自然の状態を倒錯したもの」だとヴェーバーは続ける<sup>(3)</sup>。

ヴェーバーが描く「資本主義の精神」の担い手は偏執狂であり、精神にやや異常をきたした人の姿である。しかし、誰でもが認めるように、『フランクリン自伝』に描かれたフランクリンは、明るく、楽天的で、悪戯好きであって、物事を思いつめるような人ではなかった。また、きわめて有能で、多方面に活躍しただけではなく、自身が多面的な性格を持っていた。印刷業者として成功し、自然哲学者（今日の科学者のこの時代の呼び方）として西洋にその名をとどろかせ、政治家や外交官として活躍し、独立戦争時にはフランスとの同盟を実現させて合衆国の勝利を決定づけた。独立宣言や合衆国憲法の制定にも参画した。また彼は多産な文筆家でもあった。その文章のジャンルは、宗教・道徳論から政治・経済論、新聞、暦、そして、様々な風刺の利いた随想に及んだ。ある時は「勤労と節約」を説き、ある時はイギリス本国の植民地政策を激しく非難し、ある時は世相を皮肉たっぷりに風刺し、またある時は「アメリカの最初のポルノ作家」とよばれるほどきわどい文章も書いた。しかも、フランクリンは「仮面」を被ることを好んだ。16歳で初老の寡婦 Silence Dogood に扮して新聞に随想を投稿し、最晩年にはイスラム教徒の黒人に扮して奴隷制を痛烈に批判する文章を書いた。また、イギリスではジェントルマンの身なりをし、フランスではクエイカー教徒に扮して、社交界に出入りした<sup>(4)</sup>。

したがって、フランクリンを「資本主義の精神」の体現者として一面的に捉えるヴェーバーの見方は、ほとんどのフランクリン研究者の批判の的となっている。例えばモーゼスは「フランクリンの垢抜けた美食家の側面、哲学者の側面、博愛主義者の側面を、ヴェーバーは全く理解しなかった<sup>(5)</sup>」と批評する。もっとも、20歳代と30歳代の印刷業経営時代については、フランクリンが「資本主義の精神」を体現していた、と見做す見方が可能かもしれない。しかし、これについてもフランクリン研究者たちの評価は厳しい。例えばケレーターは「ヴェーバーのようにフランクリンを世俗内禁欲の典型とみなすことには問題がある。人間の幸せについての相互に競合する合理的要請を妥協させるというフランクリンのプラグマティックな傾向こそ重要だ<sup>(6)</sup>」という。ケレーターが指摘するように、フランクリンは自分の利益だけを追求する個人主義者でもなかった。彼はそれと同時に「人々の幸せ」をも追求して行動したのである。ゴードン・ウッドが言うように「カネ儲け主義のブルジョワ的価値観の代表者であるどころか、フランクリンは『目的も

ない富の追求』にとらわれている人びとを繰り返し嘲った<sup>(7)</sup>」のである。また、ヒューストンは、フランクリンが書いた文章を、経済指針の文章をも含めて、それぞれの背景となる経済事情を考慮して理解するべきことを力説している。そして、そのような方法を通してみるならば、ヴェーバーのような見方が全く成り立たないことは明らかになる<sup>(8)</sup>。

ヴェーバー学者たちは言うかもしれない。「ヴェーバーはフランクリンを研究したのではなく、フランクリンの著作を利用して『資本主義の精神』という理念型・モデルを構築したのだから、それがフランクリンの実像と乖離していても構わないのだ」と。これは容認される弁明だろうか。歴史研究者たちによって次第に明らかにされてきたフランクリンの実像とは全く異なる空想上の「資本主義の精神」の理念型が、また同じく実像とかけ離れた空想上の「プロテスタンティズムの倫理」という理念型と親和関係があるとか、後者が前者の「母胎」であるとか論じることは、社会科学的に何の意味も無いのである。

それでは我われは「若き商工業者への助言」をフランクリンの思想の全体の中でどのように位置づければよいのだろうか。我が国の数少ないフランクリン研究者の一人である梅津順一<sup>(9)</sup>は、それを「徳を身につける努力」との関連で位置づけている<sup>(10)</sup>。すなわち、フランクリンは印刷所を経営するにあたって「13の徳」を樹立し、これを自らの生活習慣にするよう努力し、また、その実践的な方法を『徳を身につける方法 the art of virtue』という小冊子にまとめて公刊して若者たちを善導しようとした<sup>(11)</sup>。これは、ついに書かれることなく終わったが、フランクリンはその代わりに『自伝』第二部でその方法について詳述した。「若き商工業者への助言」の内容は『自伝』で詳説される「徳を身につける努力」の内容と重なっており、前者は後者の一部分を提示したものとして捉えられる。彼が発行して、よく読まれた『貧しいリチャードの暦』の数多くの格言の中にも、「徳を身につける」ことを読者に勧める趣旨のものが多い。

しかしフランクリンにとって、「徳の習得」はそれ自体が目的であったわけではない。イギリスの啓蒙主義者であるアディソンやシャフツベリ卿の場合と同じく、彼もまた、徳を身につけることは、人々が幸せになるための前提条件だと考えた。人々の幸福こそが、フランクリンの目的であった。印刷所経営の時代以後、彼は様々な社会事業を進めた。それらの中には、会員制図書館、アメリカ哲学協会、高等教育機関（のちのペンシルヴェニア大学の基礎）、私設消防団、義勇軍などが含まれる。フランクリンは科学者としても西洋にその名をとどろかせたが、彼は遠近両用メガネ、改良型ストーブ、避雷針なども発明した。これらはいずれも、人々の生活の改善に貢献したい、という意欲から生まれたものであった。

本稿は、そのようなフランクリンの様々な営為が、全体として「人々の幸せのための（人間と社会の）改善」を目指すものであったのであり、そのような意味で、モキアが示唆したように<sup>(12)</sup>、フランクリンが工業化社会の推進力としての「産業的啓蒙」の体現者であったことを明らかにするものである。

## 1 フランクリンの生涯

フランクリンの生涯については多くのことが記録されている。彼は人生の中で3度、自らの人生を振り返って回想録を執筆し、それらは彼の死後纏められて『自伝』として出版された<sup>(13)</sup>。『自伝』は彼の長い84年の人生のうちの最初の52年間の歩み（つまり1758年まで）を綴ったものであるが、その後の歩みについても、我われはかなり詳しく辿ることができる。それは彼がまことに多産な執筆家であり<sup>(14)</sup>、また若くして国際的有名人になったために、数多くの著名人が彼についての記録を残しているからである。フランクリンについての優れた伝記が多数出版されてきたのはそのためであるが、ここでは以下の論述に必要な限りで、フランクリンの生涯の概要を捉えておこう。

フランクリンの生涯は、比較的はっきりと4つの時期に区分できる。第一期は、22歳（1728年）でフィラデルフィアにおいて印刷業者として独立するまでの「修業時代」。第二期は、印刷業者として確固たる地位を築いて、42歳（1748年）で実業から引退するまでの「印刷所経営の時代」。第三期は、ジェントルマンとして科学的研究と地域の政治に貢献し、51歳（1757年）でペンシルヴェニア議会からイギリスに派遣されるまでの「地域的指導者の時代」。第四期はそれ以後の、イギリスやフランスで外交官として、また国際的文化人として活躍した「国際的文化人の時代」である。

### i) 修業時代

フランクリンは1706年に、イギリス領北アメリカ植民地のマサチューセッツ州、ボストンで、父ジョサイアとその二番目の妻アバイアとの間に生まれた。合計17人の子供の内の15番目であった。マサチューセッツは、イングランドから亡命してきたピューリタンが中心となって17世紀前半から形成されたいわゆる自治植民地で<sup>(15)</sup>、フランクリンの両親はカルヴァン派長老主義の教会の正式なメンバーであった。父は石鹼・蠟燭製造業を営んでいた。これは最も地位の低い製造業であり、子沢山でもあるので、フランクリン家は貧しかった。彼は利発だったので父は彼をハーヴァード神学校（ハーヴァード大学の前身）への進学コースであるラテン語学校に入れたが、経済的な理由からグラマースクールに転向させ、これもすぐにやめさせて製造業の徒弟修業に出そうとした。したがってフランクリンは正規の学校教育は2年間しか受けなかった。しかし彼は、小さい時から記憶力が抜群に良く、無類の読書家であった。

ベンジャミン・フランクリンは1718年に12歳で、兄ジェイムズの印刷所に9年契約で年季奉公に出されて印刷業の修業を始めたが、技術を習得する傍らで数多くの本を貪り読んだ。彼が『自伝』の中で言及するそれらの本の中で特に注目すべきは、イギリスの啓蒙思想家で小説家のダニエル・デフォーの『プロジェクト論』、ボストンのピューリタン牧師で啓蒙主義者でもあるコットン・メイザーの『ボニファキウス：善行論』、ジョン・ロック『人間悟性論』である。

彼はまたイギリスで評判の週刊誌『スペクタイター』の合本を深く研究して、思想を整理する方法を学んだ<sup>(16)</sup>。『スペクタイター』紙は、啓蒙主義思想家として有名なジョウゼフ・アディソンとサー・リチャード・スティールによって書かれたものであるから、フランクリンは少年時代から啓蒙主義思想にどっぷりと浸かったのである。イギリス領アメリカ植民地は本国イギリスの文化圏の中にあった。マルフォードは「ベンジャミン・フランクリンの世界とその知的な環境は、環大西洋的であった<sup>(17)</sup>」と言うが、それは彼の幼少のころから当て嵌まるのである。

そのような読書を通じてフランクリンは、次第に正統派キリスト教の信仰から離れていった。15歳のころには天啓 revelation そのものを疑い始め、ボイル記念講演の記録を読んで<sup>(18)</sup>、却って批判されている理神論に共感を抱き「完全な理神論者」になった。そしてフランクリンは、コリンズやラルフのような自分の友人たちをも背教に導いた<sup>(19)</sup>。そのため、ボストンの「信心深い人たちから恐ろしい不信心者だ、無神論者だと指差しされるようになった<sup>(20)</sup>」。また、フランクリンの兄との関係も悪化していった。恐らく彼は兄から見て非常に生意気だったのだろう。時事小唄を作詞して売り歩いて儲けるのはともかくも、兄に内緒で兄が発行する新聞に、世相を皮肉る随想の連載を偽名で書き続けたのは<sup>(21)</sup>、兄としては許せなかっただろう。兄弟とはいえ、両者は親方と奉公人の関係だったからである。フランクリンの兄からの暴行も激しく、父も兄を支持したので、フランクリンは年季奉公の契約を破って、ボストンからニューヨークへ、さらにはベルシルヴェニア州のフィラデルフィアに逃亡した。この行為は犯罪行為であり、彼は逮捕され送還されるべき身であったが、彼は意に介さなかった<sup>(22)</sup>。

ペンシルヴェニアはクエイカー教徒ウィリアム・ペンが17世紀末に拓いた領主植民地で、彼の方針に沿って完全な「信教の自由」が保証されていた。だから、ここはフランクリンにとって住みやすい土地柄であった。その州都であり港町であるフィラデルフィアは、フランクリンがここに来た1723年には人口約2千人の小さな町だったが、大西洋貿易の発展につれて西方に発展してその人口が増大し、1739年には約1万人、1760年には約2万人に達した。その住人は多様な民族と人種からなり、ドイツからの「信仰の亡命者」や黒人奴隷が多いのが特徴だった。また、1756年には多様な宗派の20の教会が存在していた<sup>(23)</sup>。無一文の逃亡者フランクリンは、幸いなことに、フィラデルフィアの印刷業者キーマーに職人として雇われた。

フランクリンは頭がよく、読書家でもあったので、植民地の有力者たちに可愛がられた。当時のペンシルヴェニア植民地州知事 W・キースは、フィラデルフィアで印刷業を開業するための資金援助をすると申し出た。それを信じてフランクリンは、そのための道具などを買い付けるためにロンドンに船出した。ところがその約束は空手形になった。フランクリンは船旅の中で親しくなったクエイカー商人デナムの勧めに従い、ロンドンで印刷工としての腕を磨くことを決意した。ところがラルフという友人がロンドンまでフランクリンについてきて、共同生活を始めた。ラルフはフィラデルフィアに残した妻子を捨てて、ロンドンで舞台役者になろうとしていた。この当時のロンドンは人口50万の世界屈指の大都会であった。フランクリンは真面目に働いて得た



カネを、ラルフと一緒に観劇やその他の刺激的な遊びに使い果たすのであった。

ロンドン滞在中の1725年（フランクリンは19歳）に、彼は『自由と必然、快樂と苦痛についての一論』と題する神学=哲学論文をパンフレットとして公刊し<sup>(24)</sup>、ラルフに捧げた。そこでは「宇宙の創造主である神は無限に賢く、善良で強力である」という命題から、三段論法的に次のような結論が導き出される。この世に悪というものは存在しない、人間が神の意志から離れて自由に何かをするというものはありえない、人の人生において快樂と苦痛は等価であり、来世においてその補償がなされることはない、などと明快な論理で屁理屈を展開している。フランクリンは当時のイギリスでの理神論者や懐疑主義者の論争に触発されて、このパンフレットを書いた。そして、このパンフレットのおかげで、彼はロンドンの知識人のサークルに接触することができた<sup>(25)</sup>。その経験は、フィラデルフィアでの彼のジャントー・クラブの結成に繋がっている。しかし、彼の『自由と必然』の議論は人生の意味、つまり、宗教と道德の根底を破壊するものであった。そのことに彼は問もなく気づき、パンフレットの回収・廃棄に奔走した。

この点についてフランクリンは『自伝』の中で次のように言っている。理神論者の友人であるコリンズやラルフの振る舞い、また知事キースや自分自身の不誠実な行いを顧みるに、「この教義は真実であるかもしれないが、あまり役立たない not useful」と思い始めた。そして「私は人と人との交渉 dealing が真実と誠実と廉直をもってなされることが、人間生活の幸福にとって最も大切だと信じるようになった」と<sup>(26)</sup>。つまりフランクリンは理神論を否定したわけではなかった。むしろ彼は自分の失敗から宗教に関する議論自体に興味を失い、全くプラグマティックに、人々の幸福という観点から、宗教や道德の有用性を考えるようになったのである<sup>(27)</sup>。

ラルフとの破局は突然に訪れた。ラルフはある未亡人と夫婦同然になるが、ラルフが地方に出かけている間にフランクリンが彼女にいかがわしい振る舞い familiarities に出たためであった。その結果フランクリンはラルフへの貸しをすべて帳消しにされた。しかし、悪友との腐れ縁が絶たれたことは、長い目でみてフランクリンにとって良いことであった。彼は「この時になって初めて少しは貯めようと考え始め」、ウォッツの大きな印刷所に転職した。彼はこれまでは「遊ぶために働いていた」のであるが、これからは「貯めるために働く」ようになったのだ。50人もいた他の職人たちが皆、朝食時からビールを飲むのに、フランクリンは水しか飲まなかった、という話はこの時のものである。しかし、これまで「手から口へ」の生活をしてきたために、彼は貧困からなかなか抜け出せなかった。ここでフランクリンを助けたのがクエイカー教徒の商人デナムである。彼はフィラデルフィアに戻って事業を始めるので、自分の秘書として働いて欲しい、とフランクリンにもちかけ、渡航費まで出してくれた。フランクリンは即座にこの誘いに応じた。

フランクリンのロンドン滞在は1724年末（18歳）から26年（20歳）7月までわずか1年半であったが、その滞在はフランクリンの一生にとって決定的な意味を持った。第1に彼は、印刷についての高度な技術を身につけた。第2に彼は、当代一流の知識人の知己を得て、居酒屋や

コーヒーハウスで開かれるクラブなどのアソシエーションに出入りした<sup>(28)</sup>。第3に彼は、観念的に理神論を展開することの愚かさを知り、幸福という観点から道徳と宗教の有用性を捉えるようになった。第4に彼は、道徳的な生活を心に期するようになった。フィラデルフィアに向かう船上で彼は、簡素な生活、人に対する誠実、勤労、悪口の禁止という4点からなる誓いを立てた<sup>(29)</sup>。しかし、フィラデルフィアで事業を始めて数カ月後にデナムとフランクリンは共に別々の大病を患った。デナムはそのまま天に召され、フランクリンは生死の境目をさまよったのちに、健康を回復した。ラルフとの決別以後ここまでの数カ月間の出来事は、おそらくフランクリンに回心をもたらしたのである。

フランクリンは再びキーマーに植字工として雇われたが、その年1727年(21歳)の秋に、11名の有能な知人を集めて、相互の向上を図るためのクラブを作り、これをジャントー(スペイン語で秘密結社の意味)と名づけた。フランクリンは「このクラブも40年以上も続き、当時わが植民地にあつて最も優れた哲学・道徳・政治の学校となった<sup>(30)</sup>」と『自伝』の中で誇らしげに語っている。ジャントーの組織の内容と社会的な意義については第3章第3節で検討するが、フランクリン個人にとっても、ジャントーはその後の活動の基礎となった。1728年(22歳)にはジャントーのメンバーであるメレディスの提案を受けて、フランクリンはパートナーシップ形態で印刷企業を創業した。そしてジャントーのメンバーは「みんな骨を折って仕事を取ってきてくれた<sup>(31)</sup>」。また、創業当初の資金繰りの悪い時に多額の融資を申し出てくれたのも、ジャントーのメンバーであった<sup>(32)</sup>。こうしてようやく事業は軌道に乗ったが、創設2年後にメレディスが自分の持ち分をフランクリンに売却したので、事業はフランクリンの単独経営になった。フランクリンを「独立独行 self-made の人物」の典型とみなす通説があるが、これは間違いである。金持ちの貿易商人の愛顧やジャントーの仲間の相互扶助なしには、彼が独立して事業を成功させることは不可能だったのである<sup>(33)</sup>。

## ii) 印刷所経営の時代

フランクリンは1730年に24歳で印刷企業の単独経営者になったが、1748年に42歳で経営から手を引いて有閑階級の仲間入りをするまでに、事業を拡大して巨大な富を手中に収めるようになった。その理由は大きく分けて、5つある。第1は、勤労と節約である。事業開始して間もなく、彼の「勤勉ぶりは近所の人の目にとまり、次第に評判も良くなり信用もついてきた<sup>(34)</sup>」と彼は『自伝』の中で記している。第2は、信用である。フランクリンは次のように語る。「私は印刷所のために背負った借金をだんだんに返し始めた。商人としての信用を保ち、評判を失わないようにするため、私は実際によく働き、節約を守ったばかりでなく、仮にもその反対に見えるようなことは努めて避けた。着るものは質素なものに限り、遊び場には絶対に顔を出さなかった。釣りにも猟にも絶対行かなかった。……また商売相応に手堅くやっていることを人に見せるために、方々の店で買った紙を手押し車に積んで、自分で往来を引いて帰ることもあった。こう

して、よく働く将来性のある若者だと思われ、また買った品物の代金はきちんきちんと支払ったので……私の店は次第に繁盛していった<sup>(35)</sup>」。商売において商業上の信用を得ることが重要であることは当然だが、17世紀後半の大西洋貿易の大発展によって、商業上の信用の重要性はさらに増した。すなわち、流通媒体である貨幣の不足が深刻化してきたために、商業取引のかなりの部分が信用で行われるようになった。取引の詳細を帳簿上に記録したうえで、事業家たちは一定の間隔で会って、互いの帳簿を突き合わせて、貸し借りの相殺を行う。こういうシステムの中では、事業者が勤勉で質素で正直で誠実であるという評判を失うことは、経済界では致命的なことだったのである<sup>(36)</sup>。

第3は、多角化戦略である。フランクリンは印刷所の単独経営をはじめる前年の1729年9月末には *Pennsylvania Gazette* という新聞の発行を始め、また同じころ、文房具店も併設した<sup>(37)</sup>。1732年には『貧しいリチャードの暦』を初めて出版し、その後25年間これを発行し続けたが、フランクリン自身が言うとおりの「非常に売れ行きがよく、毎年1万部近くも売れ、利益もずいぶん上がった<sup>(38)</sup>」。さらにフランクリンは、1729年から1748年までの間に約80点の大小の書籍を出版した。そのうちでよく売れたのは、ジョージ・ウィットフィールド関係のものである。アングリカンの福音主義宣教師であるウィットフィールドは1739年11月にフィラデルフィアに到着し、精力的に信仰復興の宣教活動を展開したが、フランクリンは彼と面会して、彼の旅日記と説教の写しの出版の独占権を得たのであった<sup>(39)</sup>。

第4は競争と拡大の戦略である。フランクリンが印刷所を開業したころ、フィラデルフィアには他にキーマーの印刷所とブラッドフォードのそれがあった。フランクリンは他の2つを駆逐して成長していった。まずキーマーは、フランクリンが新聞を発行する予定だと知ると、それに先んじて新聞を発行した。フランクリンはこれを妨害するためにブラッドフォードが発行している新聞に、キーマーを批判し嘲笑する記事を「お節介屋」という題で連載した。そのためにキーマーの新聞は購読者を得られず、彼は新聞経営をあきらめて、これをフランクリンに譲渡した。キーマーはフランクリンのそれとの競争に敗れて没落し、バルバドス島に移住し、まもなくそこで死んだ<sup>(40)</sup>。そのような事情をフランクリンは『自伝』の中であっさり書いているが、キーマーはフランクリンが危機に瀕している時に二度も職を与えてくれた人物なのである。そのような恩を受けながら、フランクリンは最初から相手を無能だとして軽蔑し、ついには追い落として恩を仇で返したのだ。

次には、キーマーの徒弟だったハリーが、キーマーから印刷用の道具を買って独立したが、フランクリンによれば、ハリーは怠け者で贅沢で傲慢だったので、経営的に行き詰まって、やはりバルバドスに逃れたのち、ペンシルヴェニアに戻って農夫になった。これでフィラデルフィアでの競争相手はブラッドリーだけになった。フランクリンによれば、ブラッドリーはフィラデルフィアの郵便局長の立場を利用して、フランクリンの新聞の配送を妨害した<sup>(41)</sup>。ところが1737年（フランクリンは31歳）に、北アメリカ植民地の郵政長官スポッツウッド大佐が、ブラッド



リーを解任してフランクリンをフィラデルフィアの郵便局長に任命し、ブラッドリーから特権を奪った。その結果、フランクリンの収入は増えて、ブラッドリーの新聞は衰えていった<sup>(42)</sup>。

『貧しいリチャードの暦』についても見逃せない事実がある。これをフランクリンはリチャード・サウンダーズという編集者名で発行したが、リチャード・サウンダーズは当時イギリスで大変評判の良い暦を発行していた実在の人物である。また「貧しいリチャードの暦」という題は、イギリスで17世紀から刊行された『貧しいロビンの暦』をもじったものであった。創刊号においてフランクリンは、競争相手の暦発行人であるタイタン・リーズの死亡の日時を予言するセンセーショナルな序言を書いて、人々の注目を集めることに成功した<sup>(43)</sup>。フランクリンは、この悪質な冗談で商売敵を嘲笑したのである。

単独経営を始めた後、フランクリンはロンドンから来たホワイトマッシュという腕利きの植字工を雇い、ローズという少年を徒弟にとったが、経営規模が拡大するにつれて更に多くの徒弟を抱えていった。1733年にフランクリンは、サウス・カロライナのチャールストンに職人を1人送り込んで、その地で最初の印刷所を設立した。フランクリンは彼に印刷機と活字を与え、パートナーシップの契約を結んで無機能資本家になり、経費と利益の3分の1を得ることとした。彼は間もなく死んだが、その妻が印刷所の経営を受け継いでこれを繁栄させた<sup>(44)</sup>。これが成功していったので、フランクリンは「ほかでもやってみることにし、よく勤めあげた数人の職人workmenを抜擢し、サウス・カロライナの場合と同じ条件で各地の植民地に印刷所を開かせたところ、大部分の者は上手に経営し、契約期間の六年が終わると活字を私から買い上げて、独立して経営を続けた<sup>(45)</sup>」。

第5は政商戦略である<sup>(46)</sup>。つまり、フランクリンは地元の植民地政府とのコネを事業経営に十分に活用したのだ。それは印刷所開業当初から行われた。すなわち、ペンシルヴェニアでは紙幣増発の要求が高まっていたが、フランクリンは『紙幣の性質と必要』と題するパンフレットを1729年に書いて、これを効果的に援護し、増発案は植民地州の集会で可決された。州会はフランクリンの功績に報いて、紙幣印刷の仕事を回してくれた。また、ロンドンに向かう船上で知己を得た州会議員ハミルトンが、デラウェア植民地の紙幣、法文、議事録の仕事も回してくれたので、フランクリンは大いに潤った<sup>(47)</sup>。1736年(30歳)にフランクリンはペンシルヴェニア州会の書記に選出されて、以後1751年までこれを務めたが、そのために「議事録や法文や紙幣の印刷、それに概して利益の非常に多い公共のための臨時の印刷物など」の仕事を取ることができた<sup>(48)</sup>。続いて1737年には前述のようにフランクリンはフィラデルフィアの郵便局長に任命された。フランクリンによると「これは非常に利益のある仕事であった。給料はわずかだったが、このために通信が便利になったので、新聞の内容を良くすることができ、部数も増え、掲載広告も多くなって、大きな収入が得られるようになったからである<sup>(49)</sup>」。更にフランクリンは、その後しばらくの間アメリカの郵政長官に雇われて会計監査官となったが、1753年に長官が他界すると、イギリスの郵政長官の委任を受けて、ウィリアム・ハンターとともにその職を引継い

だ<sup>(50)</sup>。

このように、有能な事業家としてフランクリンは巨大な富を得て、1748年（42歳で）実業界から身を引いた。『自伝』では「勤勉誠実で非常に有能なデイヴィッド・ホールを私の経営パートナーにしていたが、この人が印刷所の世話は全部引き受けてやってくれ、わたしにはきちんきちんと利益の分け前 my share of the profits をよこしてくれた<sup>(51)</sup>」との記述がある。現存の史料によれば、フランクリンはホールから年平均で600ポンド以上を受け取っていた、といわれる。フランクリンにはその他に、州政府からの収入があり、製紙工場からの収入、沿岸諸都市の不動産の賃貸料収入、金融業からの収入、そして土地への投機からの収入があった。ゴードン・ウッドは、それらすべてを含めて、フランクリンの総収入は年間2,000ポンド近くに達した、と推定する。これはイギリスの貴族並みの収入であり、当時のペンシルヴェニア植民地の総督の給料の2倍であった。また、同じころのイギリスの手工業者や自営農民の年間収入が約40ポンド、専門職である弁護士のが約200ポンドであったことを勘案すると、フランクリンの裕福さがわかる<sup>(52)</sup>。もちろん、勤労、節約、正直といった徳行の実践だけでは、このような富を手に入れるのは不可能である。彼がこれほど富裕になったのは、それらの徳行を実践しただけではなく、アメリカ資本主義の興隆期に特有の様々なビジネスチャンスを抜け目なく捉えて、それらを上手に処理する革新的企業家 innovator としての手腕を持っていたからである。特に新聞経営は、政治・経済・社会の幅広い情報を早く入手することに役立った。フランクリンは、それらの情報を利用して富を蓄積する企業家的能力に長けていたのである。

### iii) 地域的指導者から国際的文化人へ

フランクリンは、こうして十分な財産を蓄えて、私的なビジネスから離れることができ、その後は余暇を慰安や科学研究に費やそうと思った。18世紀において自然哲学=科学はジェントルマンの領分であり、余暇はそのステイタス・シンボルであった。フランクリンは啓蒙されたジェントルマンとしての自らの地位を証明し、「役立つ知識」を追求するために、余暇を利用しようとしたのである<sup>(53)</sup>。しかし、消防組合、学術協会、高等教育機関、そして義勇軍などのさまざまな公益事業でフランクリンがそれまでに見せてきた手腕を、多くの人々は見逃さず、彼に様々な公共の仕事を押し付けてきた。彼は1748年に年フィラデルフィア市会議員に、1749年に治安判事に、1751年には市参事会員に選出されて、ペンシルヴェニア植民地議会の議員になった。また1753年には、前述のとおり、北米植民地全域の郵政長官に就任して郵政事業の合理化を進めた。

1754年にフランクリンは、ペンシルヴェニアを代表してオルバニー植民地会議に出席し、全植民地が一つの政府の下に連合する案を提出した。この案は植民地会議で可決されたが、イギリス本国と各植民地政府はこれを否決した<sup>(54)</sup>。1757年7月に彼は、ペンシルヴェニアの領主所有地への課税問題に関してペン家の人々と交渉するために、州会を代表して渡英した。しかし交渉

は一向に進展しなかったので、フランクリンはペンシルヴェニアを領主植民地から王領植民地に変えるよう国会議員に働きかけた。イギリスの国会議員との交流を深める中で、フランクリンは徹底したイギリス帝国主義者で王党派になっていった<sup>(55)</sup>。つまり自らを、アメリカに住んでいるイギリス人と自覚し、イギリス国王を崇敬するようになったのである。

イギリスに対するフランクリンの立場は、フレンチ・インディアン戦争（七年戦争、1756～1763年）以後、微妙なものとなった。終戦後イギリスは、北アメリカの駐留軍の莫大な維持費を捻出するために、アメリカの植民地人に新たな租税を課すことを試みた。これに対して植民地人の怒りが爆発した。そういう状況の中で、イギリスに在留したフランクリンは本国と植民地の間を取り持つために執筆活動を続け、イギリス政府や国会は、彼を植民地の立場を代表するスポークスマンとして扱った。1765年に成立した印紙税法はフランクリンの努力もあって翌年廃止されたが、1767年には新たにタウンゼント関税諸法が成立した。フランクリンはなおもイギリスに在留して新設のアメリカ省で働くことを望んだが、猟官活動に失敗し、ハチンソン漏えい事件によって政府の信用を失い、枢密院で侮辱されるに及んで、ついにイギリスを見限ってアメリカに戻った<sup>(56)</sup>。

1775年5月にフランクリンがフィラデルフィアに戻った時には、アメリカ独立戦争の戦闘は始まっていた。フランクリンは一転してアメリカ愛国派として、アメリカの分離独立を強硬に支持した。翌1776年7月4日にアメリカは独立を宣言したが、フランクリンはその宣言書の起草委員として活躍した。彼はその年の12月に、外国の援助を得るための使節としてフランスに派遣された。

フランスではフランクリンは、先端的な科学者、啓蒙主義者、アメリカの代表的な共和主義者として偶像視されていた。パリ郊外のパシーで快適に暮らし、またサロンに出入りして多くのフランスの知識人と親交を結んだ。彼の努力も与って、フランス王国は1778年2月にアメリカ合衆国との軍事同盟条約を結んだ。これが合衆国のイギリスに対する勝利を決定的にした。合衆国とイギリスとの講和条約は、1783年9月にパリで調印され、フランクリンは1785年9月にフィラデルフィアに戻った。フィラデルフィアの人々は彼の帰国を歓呼して迎えたが、アメリカ連邦会議はそうではなかった。彼の政敵によって支配された連邦議会は、彼を憲法制定会議のメンバーに選んだものの、海外でのその政治的な貢献に報いることは一切しなかったのである<sup>(57)</sup>。

## 2 フランクリンにおける宗教と道徳

フランクリンの啓蒙主義のエートスを検討する前に、我われはその前提となる彼の宗教観と道徳論を明らかにしておこう。植民地時代のアメリカは、完全に本国イギリスの文化圏の中にあっただけで、我われはまず、17世紀末以後のイギリスの宗教・道徳思想を概観しなければならない。

## i) 18世紀英米の宗教

キリスト教とは、新約聖書の福音書に証しされているイエスが救い主、すなわちキリストだ、と信じる宗教である。この信仰を中心として紀元4世紀に纏められたニケア・コンスタンチノープル信条は、カトリックとプロテスタントに共通する基礎的な信条である。宗教改革運動は16世紀前半に、ローマ教皇とカトリック教会の権威を否定することから始まった。16世紀後半にはカトリック・プロテスタントの両陣営のあいだで熱狂主義が蔓延して、西ヨーロッパでユグノー戦争やネーデルラント独立戦争などの宗教戦争が起こった。しかし、17世紀の中ごろまでにドイツの三十年戦争が終息すると、西ヨーロッパで両陣営の中で、逆に、理性的で穏健な信仰が広がっていった。

イングランドでは1530年代に、国王ヘンリー8世の主導の下で宗教改革が行われ、イングランド教会が成立したが、その神学はカトリックのそれと大差のないものであった。だが、その子エドワード6世とエリザベス1世の治世にはカルヴァン主義の神学がアングリカン教会の中に浸透してきた。「ピューリタン」とは、イングランド教会の宗教改革を徹底して、教会を浄化 purify しようとした人々を指す。17世紀のステュアート朝の王たちがピューリタンに対する抑圧を強めたこと、特にチャールズ2世の下でのW・ロード大主教による弾圧政策が、ピューリタン革命の諸原因の一つであった。革命が成功して1649年に共和国が成立すると、イングランド教会体制は廃棄されたが、1660年には王政復古が行われてイングランド教会は再建された。国民は国王と国教会への忠誠を強制された。しかし国教会内部には、非国教徒を包摂して体制を安定させようとする穏健な広教主義 latitudinarian 聖職者が現われ、1688年の名誉革命以後、国教会の高位聖職を独占した。彼らの神学は合理的キリスト教であった(ジョン・ロックやアイザック・ニュートンの宗教思想はこれと同種のものであった)。彼ら広教主義者たちは、理神論、懐疑主義、無神論に対しては容赦なく批判の矛先を向けた。フランクリンが『自伝』の中で触れている、いわゆるボイル記念連続講演は、それらの脅威からキリスト教を守るという目的で開催された<sup>(58)</sup>。

中世ヨーロッパにおいてキリスト教信仰と科学は、スコラ哲学の体系の中で見事に調和させられていた。しかし、17世紀の「科学革命」をとおしてガリレオ・ガリレイからニュートンに至る「機械論哲学」が科学思想の主流になってくると、信仰と科学の関係に危機がもたらされた。イングランド広教主義の「合理的キリスト教」は両者の関係を保つための一つの解答であったが、17世紀中ごろにはホブズ流の無神論が、17世紀末には不可知論や理神論が現れた。無神論はもちろんのこと、理神論もキリスト教ではない。理神論は、至高の存在(宇宙の創造主である第一原因)とそれに対する人間の義務を理性が示すことを認めるが、キリスト教の信仰を否定するものである。例えば、ジョン・トーランドは、キリスト教の教えの中で理性の光で説明できない神秘的なことはすべて否定されるべきである、とした<sup>(59)</sup>。ロンドンに在って『自由と必然』を執筆した時期のフランクリンの立場は、不可知論に近い理神論であった。

教義や信仰生活において理性を重視する考え方は、非国教徒（王政復古以後、ピューリタンとカトリックはそのようにして括られるようになった）の間にも次第に浸透していった。例えば「ピューリタン牧師」バクスターがそのよい例である。理性重視はカルヴァン主義の中では普遍救済説をとるアルミニウス派と結び付きやすかった。18世紀前半には、元国教徒聖職者のTh.・リンゼーと非国教徒のJ・プリーストリーに指導されて、ユニテリアン派が成立した。これは、アリウス主義やソツィーニ主義の流れをくみ、聖書に記された奇跡については信ずるが、キリストの神性を否定する異端であり、厳密な意味では、これもキリスト教ではない。

## ii) フランクリンの宗教論

フランクリンが生まれたマサチューセッツは、スコットランドやスイスのジュネーヴと同様に、カルヴァン主義の神政政治が行われたところである。彼の両親は、カルヴァン主義の長老派教会の正式のメンバーであった。フランクリンは、少年時代にこれに反発した。彼は『自伝』の中で次のように言う。「私は長老派教会の会員として宗教的に教育されたが、『神の永遠の定め』『神の選び』『永遠の罪への定め』といったこの宗派の教義は不可解であり、他にも疑わしい教義があったので、日曜日の礼拝集会には出ないことにしていた<sup>(60)</sup>」。そして彼は、前述のように、15歳のころには完全な理神論者になり、ロンドンで19歳で『自由と必然』を書いたが、その後の彼の宗教思想の変化を捉えるのは難しい。それは彼が宗教論について纏まった記述をしていないからである。例えば、ホッファーはフランクリンが一生を通じて理神論者であったと考え、ケレターはフランクリンの宗教が一種の「自然宗教」であったと理解し、ヴィーンバーガーはそれが「道徳的・宗教的懐疑主義」であったと捉え、オールドリッジはそれが「多神教」であったとする<sup>(61)</sup>。このように、フランクリン研究の専門家は、いずれも彼がキリスト教から離れてしまったと考えるのだが、他方ではフランクリンが最後までピューリタニズムの影響を保持していたとする俗説が、生きながらえている。しかし我われは、『自伝』や幾つかの文書を精査して、彼の宗教思想の性格を掴むことができる。

『自伝』によれば、フランクリンは、メレディスとのパートナーシップの形態で印刷所を創業した1728年の11月に「信仰箇条と宗教的行為」と題するメモ<sup>(62)</sup>を書いて、それを使って神への祈りを奉げることにした<sup>(63)</sup>。この文書は極めて重要である。なぜなら、その内容は一度も公にされず、全く私的な目的に使われたのだから、フランクリンの本当の考えが示されているからである。『自由と必然』を公表してから3年の苦闘の中で、彼がたどりついた宗教観がそこに示される。

この文章の冒頭でフランクリンは「私は、一つの至上の、最も完璧な存在を信じる」と宣言し、その存在が神々自身の創造主であり、父である、という。ここからオールドリッジはフランクリンの多神教信仰を推定する。しかし私は、これがフランクリンの「有神論的大局観 Theistic Perspectivism」を表現しているというウォルターズの見解を、より説得的だと思う。つまり、



至高の神は人間にとってあまりにも偉大で遠く、人間の理解を超えているので、その至高の神は自らと人間の間に、イエス・キリスト、アッラー、アフラマツダ、仏陀といった神々を創造した、とフランクリンは考えたのである<sup>(64)</sup>。フランクリンの宗教観の本質がそこにあると解ると、宗教に関する一見不可解な彼の言動がすべて理解可能となる。つまり、第1に彼は、全ての宗教に共通する信条をまとめ、それを自分の信条にした。第2に、したがって彼は諸宗派の教義の詳細については全く興味を持たず、あらゆる宗教・宗派の信仰者と親しく付き合った。第3に、したがってまた、彼は宗教よりも道徳を重視した。このような彼の宗教・道徳観は、まさに啓蒙主義に典型的な思想なのであった。これらの点を、次に説明しよう。

『自伝』の中で、親から与えられたカルヴァン主義長老派の信仰を拒否した理由を説明した部分で、フランクリンは「宗教的な主義を全く持たないわけではなかった」と述べてこう続ける。「例えば神の存在、神が世界を創造し、摂理に従ってこれを治め給うこと、神が最も喜ばれる人間の奉仕は人に善を為すこと、靈魂の不滅、全ての罪と徳行は、現世あるいは来世において、必ず罰せられ、または報いられる」ことを疑ったことはない、という<sup>(65)</sup>。ここには『自由と必然』と矛盾した内容が含まれるので、虚偽が含まれている。だがフランクリンは、そのような境地にすでに1731年には到達していた。この年に彼が紙片に書き記した「信仰箇条の要点」が『自伝』の中で次のように紹介されている。「万物を創造された唯一の神がいる。神は摂理によって世界を治めたまう。神は畏敬と祈りと感謝をもって礼拝されるべきである。しかし、神が最も喜ばれる人間の奉仕は人に善を為すことである。靈魂は不滅である。神は、現世あるいは来世において、徳には報いを、罪には罰を必ず与えたまう」と。フランクリンによれば、これはあらゆる既成宗教の本質的な部分を含み、また、どんな宗派の信徒からも嫌われないものであった<sup>(66)</sup>。

注意されたい。このフランクリンの信条はキリスト教のものではない。カトリックとプロテスタントに共通する基本的信条である「救い主としてのイエス・キリスト」、原罪とイエス・キリストによる贖罪、神の聖霊の働き、神のことばの啓示としての聖書、これらすべてがフランクリンの信条からは抜け落ちている。「信仰箇条の要点」は、各国の善良有徳な人々を糾合して作られるべき「修徳同盟」の基本信条として記されたものであったが、この組織は主にフランクリンの多忙のゆえに実現しなかった<sup>(67)</sup>。これはフランクリンにとっては挫折だったのだろうか。そうではない。『自伝』では全く触れられないが、彼はこの1731年にフィラデルフィアのフリーメイソンのセント・ジョン・ロッジに加入した。「修徳同盟」を設立したいという彼の啓蒙主義的な夢は、ここで十分に満たされたのである。1734年にはフランクリンは『フリーメイソンの規約』を印刷出版し、のちにはペンシルヴェニアのすべてのロッジのグランド・マスターになった。フランスに派遣されると、フランクリンはフリーメイソンの「ミューズ9女神のロッジ Loge des Neuf Soeurs」に加入して、フランスの多くの知識人とこれを通じて交際した。1780年代初めには彼はフランスのすべてのロッジのマスターを務めた。フランクリンは生涯ずっとフ

リーメイスンであり続けた。そこが彼の安住の地だったのである<sup>(68)</sup>。

次に第2点について。既成宗教のすべてに共通する信条だけを一体化して信奉する「有神論的大局観」を採用したからこそ、フランクリンはキリスト教の諸宗派の教義には興味を持たなかった。彼はフィラデルフィアでは長老派の教会に所属していたが、その牧師の説教は「主として神学上の論争か、この宗派独特の教義の説明で、どの説教も私には無味乾燥で興味を惹かず、また教えられるところもなかった<sup>(69)</sup>」という。フランクリンはヘンプヒル事件の後にアングリカン教会に移るが、ここでも彼は国教会祈祷文の簡約化を試み<sup>(70)</sup>、『ヨブ記』の現代語訳と称してイギリスの政治を茶化すありさまであった<sup>(71)</sup>。アングリカンの福音主義巡回説教師ウィットフィールドとの交際は、両者が1739年にフィラデルフィアで面会して以後、前者が世を去るまで続いた。両者はウィットフィールドの著作の出版を介して互恵関係にあった。つまり、ウィットフィールドは自分の説教を広く世に伝えることができ、フランクリンは大儲けしたのだ。フランクリンはウィットフィールドの誠実さ、伝道への熱意、説教のテクニック、そしてジョージア州での孤児院建設の努力を高く評価したが、最後までキリスト教に帰依することはなかった<sup>(72)</sup>。

フランクリンは、諸宗教・諸宗派を、教義的に柔軟であるかどうか、道徳性の高さ、社会的有用度などによって格付けした。例えば、自分たちが完全な真理を知り得ていないという謙虚な立場から信仰箇条を公開しないダンカー教徒は高く評価され<sup>(73)</sup>、絶対平和主義のために政治的に困難に陥ったクエイカー派はそれより低く評価され、カルヴァン主義長老派はその教義的厳格さのゆえに最悪だとみなされた<sup>(74)</sup>。したがってフランクリンは、『迫害に対する寓話<sup>(75)</sup>』などで宗教的迫害や熱狂主義を皮肉ったが、時には怒りをあらわにすることもあった。1763年12月にペンシルヴェニアで起こった狂信的長老派教徒によるインディアン大虐殺を、彼は救すことができなかった<sup>(76)</sup>。

第3に、フランクリンの「有神論的大局観」と表裏一体の関係にあるのが、宗教よりも道徳を重視する見方である<sup>(77)</sup>。『自伝』の中でフランクリンはロンドンからフィラデルフィアに戻った時点での自分の宗教・道徳観を振り返って、次のように言う。「私は、人と人との交渉が真実と誠実と廉直とをもってなされることが、人間生活の幸福にとって最も大切だと信じるようになった<sup>(78)</sup>」と。その当時の私的なメモ「信仰箇条と宗教行為」の中でもフランクリンは、神は人間が幸せになることを望まれるが、善良でなければ人はこの世では幸せになれないのだから、神は人が善良であることを望まれるのだ、と記している<sup>(79)</sup>。

前述のようにフランクリンは長老派教会に所属しながら、教会には行かなかった。ところが1734年に赴任してきたヘンプヒルという青年牧師は徳行を繰り返し説いたので、フランクリンは彼をすっかり気に入って、教会に出かけるようになった。しかし保守的な信徒は、正統派の牧師と組んでヘンプヒルを異端者として長老会 synod に告発した。フランクリンはパンフレットや新聞記事でヘンプヒルを擁護したが、彼はついに罷免されてしまった。そのためフランクリン

も、広教主義のアングリカン教会に移ったのである<sup>(80)</sup>。長老教会からアングリカン教会に移ったとしても、それは表向きのことであって、フランクリンの心はフリーメイソンにあった。1749年にはフィラデルフィアでフリーメイソンのメンバーのスキャンダルが話題になり、フランクリンはこれについて新聞紙上で論戦を張った。この時に心配して手紙をよこした両親に対して、フランクリンは手紙で「心配ご無用」と書いている。その中でも彼は「正統主義が美德よりも尊重されるようなときには、生き生きした宗教はいつも苦難を受けてきた」と述べたのである<sup>(81)</sup>。ウォルターズが言うように、フランクリンの「有神論的大局観」は、そのような意味でまさに啓蒙主義的な宗教観だったのである<sup>(82)</sup>。

### iii) フランクリンの道徳論

美德の追求は啓蒙主義者にとっての最大の課題のうちの一つであった。野蛮で無知で、権力に追随し、因習的な生活を無意識に続けている状態から、人々を理性の働きによって目覚めさせるのが「啓蒙」であるから、啓蒙された人間は洗練されて、道徳的になっているはずなのだ。ウッドによれば、「啓蒙時代における知識人の全員が、ニュートンなどの科学者によって明らかにされた自然界における物理的諸力に匹敵する人間界の道徳的諸力を発見することに心を奪われていた。フランクリンもまた然りであった<sup>(83)</sup>」。フランクリンは『自伝』第一部の執筆の目的について「私の子孫でこれを読む者に、この物語全体を通して勤労の徳がどのように私に幸いしたかを見て、勤労の徳の効用 use を悟ってもらいたい<sup>(84)</sup>」という。彼は『徳への道 Art of Virtue』と題するパンフレットの執筆を企画しており、友人B・ヴォーンからもその出版を要請されたが、結局その余裕が無くなってしまったので『自伝』の第二部において、その内容を詳述したのであった。

デボラ・リードと結婚した後の1731年(25歳)に、フランクリンは「道徳的完成に到達しようという不敵な、しかも困難な計画」を思い立った。啓蒙主義者たちの中であってフランクリンに特徴的なのは、徳は理性の働きだけでは身につかない、と考えた点にある。彼は自分自身の体験から「人間性悪説」を取るようになっていた。彼の食欲や性欲は人一倍強く、彼はしばしば自分の欲望に屈した。彼には肉食主義を实践した時期があったが、ボストンからフィラデルフィアへの船旅の中で鱈の揚げものの良い匂いに誘われて、屁理屈をつけて肉食の禁を破ってしまった<sup>(85)</sup>。デボラと結婚する前にゴッドフリー家の娘との縁談が破談になったが、その直後には「容易に抑えることのできない青年時代の情欲に駆られて、たまたま出会った怪しげな女たちとしばしば関係を結んだ<sup>(86)</sup>」。欲望が理性で抑制できないことを悟ったからこそ、フランクリンは徳行を習慣化することによって身につけようとしたのである<sup>(87)</sup>。

そこでフランクリンは、自分にとって必要なすべての徳を13項目に纏めて、一定期間どれか一つに集中して、それがマスターできたならば次に進むという方式を考えた。したがって13徳は、基本的であり他の徳のマスターにとって前提になるものから順に並べられた。

それらは、1 節制（つまり、暴飲暴食の禁止）、2 寡黙、3 秩序（つまり、整理整頓と時間厳守）、4 決断（とその実行）、5 節約、6 勤労、7 誠実、8 正義（つまり、人に損害を与えないこと）、9 中庸、10 清潔、11 平静、12 貞節、13 謙譲、以上である。フランクリンは小さな手帳に表を作り、1 頁を1週間分とし、縦軸に13の徳目、横軸に曜日を記して、毎日の過失を記入していくことにした。貸借対照表か小遣帳の要領である。この小さな手帳には題句として、啓蒙主義者アディソンが著した悲劇『カトー』の一節、ローマの雄弁家キケロの随想の一節、そして「ソロモンの箴言」の一節を記した<sup>(88)</sup>。これらはいずれも、キリスト教とは直接関係ないものである。

そして彼は、検査表の冒頭には次のような祈祷文を書き加えた。「おお、全能の神 powerful goodness よ。恵み深き父よ。慈悲深き指導者よ。わがまことの道を見出すあの知恵を増させたまえ。その知恵の指し示すことを成し遂げる決意を強めさせ給え」。また詩人トムソンの詩からとった次のような一節も使った。「光と命の父、汝最高善の神よ。我に善きことを教えたまえ。……愚かしきこと、空しきこと、悪しきこと、全ての卑しい仕業から我を救いたまえ。わが魂を、知恵と平安と聖なる徳、聖にして実あり衰えることなき祝福で、みたしたまえ」<sup>(89)</sup>。これらは、クリスチャンのいわゆる「主の祈り」とは全く趣を異にするものである。「主の祈り」ではまず、父なる神を賛美し、神の支配が地上で実現することを祈った上で、自分個人ではなく「私たち」信仰者が、飢えることなく、罪を犯さず、誘惑に会わないように願うのである<sup>(90)</sup>。ところが、フランクリンとトムソンの祈りは、全く個人主義的であり、知恵や徳性の獲得を神に一方的におねだりしているだけなのである。フランクリンにとって、本当の主役は神ではなく、人間である。ここにもフランクリンの啓蒙主義的な精神が現れている。

ところで、「13徳」の実践は成功したのだろうか。実際にはあまりうまくいかなかった。フランクリンはその点を正直に告白している。「大体からいえば、私は自分が心から願った道徳的完成の域に達することはもちろん、その近くに至ることさえできなかった。しかし、努力したおかげで、このような努力をしなかった場合に比べて、人間も良くなり、幸せにもなった<sup>(91)</sup>」と。「人間が良くなったかどうか」は、本人が判断することではない。しかし、「幸せ」は本人が判断することである。フランクリンは性格改善の努力によって、確かに少しは有徳になり、その結果幸せになれた、と実感した。この点は重要である。フランクリンにとっては、美德はそれ自体が目的なのではなく、幸福という最終目的のための手段だったのである<sup>(92)</sup>。企画倒れに終わった『徳への道』も「幸せ」という目標のために徳を積む方法を解き明かすものだった。この点について、フランクリンは次のように明言している。「この小著で私が説明し強調したいと思ったのは、人間の本性だけを考えてみても、もろもろの悪行は禁じられているから有害なのではなく、有害だから禁じられているのであり、従って来世の幸福を望む者はもちろん、現世の幸福を望む者にとっても、徳を積むことは有利なのだ、という教えであった<sup>(93)</sup>」と。



### 3 ベンジャミン・フランクリンの産業的啓蒙主義

#### i) 18世紀啓蒙とフランクリン

啓蒙主義は18世紀のヨーロッパにおいて、科学、政治、経済そして社会の在り方を理性の光に照らして見直そうとした文化的・思想的な運動である。それは、野蛮や無知蒙昧、因習、伝統や権威と対立し、批判的で民主的で建設的な文化的・思想的な運動である。啓蒙主義に関する古典的な見解はカッシーラーやP・ゲイによって代表されるが、彼らは啓蒙主義を、少数の偉大な思想家たちに共有された一つの思想的統一体として捉えた<sup>(94)</sup>。しかし1970年代以後、啓蒙主義についての多様なアプローチが現われ、その理解は深まった。まず啓蒙主義は、上流と中流の知識人たちの幅広い文化運動として理解されるようになった。啓蒙主義者たちが形成したサークルでの議論は、新聞やパンフレットなどの情報媒体を通して社会に流布し、それがハーバマスのいわゆる「近代的公共圏」を形成し、国々の政治や経済の政策に影響を与えたことが明らかにされた<sup>(95)</sup>。

啓蒙主義が展開した背景には、17・18世紀ヨーロッパ社会の大規模な変化がある。商工業の発展、都市化、人口急増、交通革命など、一言でいえば「前工業化社会から工業化社会への移行」が劇的に進行していた。啓蒙主義を最も深いところで支えていたのは「科学革命」の展開である。人々は自然の諸法則だけでなく、経済や政治や社会の諸法則の解明に夢中になった。啓蒙主義者たちは明るい未来の社会への展望を共有していた。したがって、啓蒙主義は人間の究極的な問いを、宗教的な「救済」から現世的な「幸福」に変えた<sup>(96)</sup>。

啓蒙主義の現われ方は、各国の文化的、政治的背景の相違に規定されて国ごとに異なるといわれるが、啓蒙主義を中流の知識人まで含めた幅広い文化運動として捉えるならば、それがイギリスで最も早く展開したことは、当然といえるだろう。イギリスでは1640年代のピューリタン革命と1688年の名誉革命によって絶対王政が廃棄され、市民政府が成立した。名誉革命体制をイデオロギー的に支えたのはロックの『統治二論』(1690年)と、ニュートンの『プリンキピア』(1687年)である。ロックとニュートンの哲学はフランシス・ベーコンの経験主義的な観察方法によって基礎づけられていた。ロックの私的財産権論と人権思想は、イギリスの個人主義思想と経済的自由主義を育んだ。ニュートンは、数学的に表現される諸法則によって支配される物体の動きを理解する機械論的な自然哲学の頂点を極めた。ニュートン主義は広教主義を支持する自然観を提供したので、名誉革命後のアングリカンの支配体制を擁護するために利用された。科学研究は知的な進歩への信念、つまり啓蒙主義のプロパガンダを支持する基礎となった<sup>(97)</sup>。

イギリス啓蒙主義者というロックやニュートン以外に、イングランドのペティー、デフォー、シャフツベリー卿、マンデヴィル、アディソンとR・スティール、あるいはスコットランドのハチスン、ヒューム、ファーガソン、ステュワート、アダム・スミスなどの思想家たちが思い浮かぶ。しかし啓蒙主義の社会的、文化的な意義としてもっと大事なものは、そのような大思



思想家の議論が、読者家大衆 reading public の間に受け入れられて咀嚼されていったこと、またニュートン主義がデサグリエなどの科学者たちによって知識人大衆に浸透していったことである。その媒体は印刷物と知識人のアソシエーションであった。イギリスでは1695年に検閲法が失効し、それ以後、印刷業界は自由市場になった。1620年代の出版物は約6,000点であったが、1710年代には約21,000点、1790年代には56,000点以上が出版され、1660年と1800年の間に約30万タイトルの出版物が現われ、約2億部が印刷された。1712年にはロンドンで一面新聞が約20種類発行され、1週間で25,000部発行されたが、1760年には35種類の地方新聞が1週間で約20万部発行された。また雑誌も種々発行され、1800年にはイングランドだけで250種類の定期刊行物が発行されていた。出版社は地方都市にも誕生し、哲学者が学識者 men of letters として俗世間で活躍して生計を立てられるようになった。こうして印刷物は、啓蒙主義的な見解と価値観、つまり、人間の理性的活動による進歩と改善を信じ、現世的幸福を追求するエートを流布させるためのエンジンとなったのである<sup>(98)</sup>。

フランクリンは『自伝』の中で、ロンドンでの修業時代に、マンデヴィルがクラブを作っていた居酒屋ホーンズ亭でマンデヴィルに面会したことや、パットスン・コーヒー店でベンバートン博士に面会したことに触れているが<sup>(99)</sup>、コーヒーハウスは知識人のたまり場であり、そこからクラブなどの知識人のアソシエーションが生まれた。18世紀の中ごろには、ロンドンだけでも、クラブやその他のアソシエーションは約2,000存在し、フリーメイスンのロッジはイギリスで1725年に52存在し、1768年にはその数は300近くに増加していた<sup>(100)</sup>。フランクリンは少年時代から啓蒙主義者たちの著作を読み耽ったが、ロンドンでは啓蒙主義者たちが創り出した公共圏に実際に浸ることができたのである。

フランクリンがフィラデルフィアに戻った後に、「13徳」の実践を企て、ジャントー・クラブを設立し、またそれを母体としてさまざまな公共事業を展開し、新聞や暦を発行し、さらに科学実験を進めたのは、いずれも啓蒙主義の精神によってであった。電気に関する実験によって科学者としての地位を確立すると、フランクリンは（ペンシルヴェニアの領主である）ペン家の秘書であったジェイムズ・ローガンを通じて「文芸共和国」の仲間入りを許された。ペンシルヴェニア議会を代表してイギリスに渡ると、フランクリンはロンドンとスコットランドで多くのイギリスの啓蒙主義者と交流した。また、大陸会議からフランスに派遣されると、フランスの啓蒙主義知識人たちと親しく交わった。フランクリンはこうして、アメリカにおける文芸共和国のドメインを創造し、他の誰よりもそこで活躍したのであった<sup>(101)</sup>。これらの点について、以下で詳しく検討しよう。

## ii) 暦, 新聞, パンフレット

印刷物は啓蒙主義のエンジンであった。フランクリンは大著を書かなかった。彼はその啓蒙主義的アイデアを、暦、新聞や雑誌の論説、そしてパンフレットの中で展開した。

フランクリンは『貧しいリチャードの暦』を1732年に創刊し、1757年まで発行した。1736年には年間1万部発行されたが、その後、彼は他の印刷業者の暦を受け継いで合計12種類の暦を89刷発行した<sup>(102)</sup>。彼はそれを、字が読める人々、つまり中流層を啓蒙する手段の一つだと心得ていた。彼は自伝の中で次のように語る。「またこの地方の近隣の町村で、これ（『貧しいリチャードの暦』）のないところはほとんどないくらい広く読まれているのを見て、私は、暦は他の本などほとんど買わない一般市民の間に教訓を伝える格好の手段になると思った。そこで暦の中の余白をすっかりことわざ風の文句で埋めた。その大部分は勤勉と節約とが富を得る手段であり、したがって徳を完全に身につける手段であることを説いたものであった。なぜなら『空の袋は真っ直ぐには立ち難い』ように、人は貧乏な場合の方がいつも真っ正直に暮らすことは容易ではないのだから<sup>(103)</sup>」。

このフランクリンの文言については、2つの点に留意する必要がある。第1に、暦の余白を金言や警句で埋め尽くすというのは、暦では普通のことであって、フランクリンの『貧しいリチャードの暦』がその意味で特殊であったわけではない。ただし、フランクリンの金言や警句は、他の暦のそれらよりは気が利いていた。それらの内でフランクリンが独自に作ったものは1割以下で、ほとんどは17世紀のイギリスで人口に膾炙したものだが、彼はそれらを短くしたり、鋭くしたり、リズムカルにしたり、あるいは植民地アメリカの現状に合うものにアレンジしたのだった<sup>(104)</sup>。

第2に、金言や警句の大部分が勤勉と節約を説くものだったというのは、フランクリン自身の記憶違いである。1757年に纏められてその後パンフレットになった『富への道』がよく売れたので、『自伝』を書いたころまでに錯覚が生じたのだろう。実はその内容はきわめて多岐に亘り、「勤勉と節約」という職業訓はむしろマイナーなテーマなのであった。『貧しいリチャードの暦』の格言を詳しく研究したルメイは、それらが全体として、フランクリンの人間論、道徳論、社会論を反映しているという。

格言の中には、まず、礼儀作法の改善を説くものが多い。「育ちの良い人は、誰とでも親しくすることを目標とするはず」「目上の人には遜り下り、同等の人には丁重に、目下の人には気品をもって接するのは義務」といった具合である。人間の本性の悲しさを嘆く格言も多い。「阿呆の始まりは、自分自身を賢いとうぬぼれること」「高慢と通風を治すのは、まず無理だ」「黄金時代というのは、いつも昔のこと」「だれでも長生きしたと思うが、年寄になりたいとは思わない」「三人で秘密を守るのは可能。そのうちの二人が死んじまえば」「誰もが隣人の陰口を言う性向を持ったのは、神の摂理」「医者を相続人にするのは阿呆」「汝の隣人を愛せ。ただし隣との垣根を取り払うべからず」といった具合である。暴飲暴食を咎める警句も多い。「生きるために食べる、食べるために生きるな」「泥酔は最悪。人々を阿呆にし、獣にし、悪魔にもする」という具合である<sup>(105)</sup>。

宗教・道徳に関する金言も、すでにみたフランクリンの宗教・道徳論を反映するものである。

「宗教を語るのは、虎を鎖から解き放つと同じ」「アリより上手な説教師はいない。アリは何も話さないのだから」「この世のことについては、人は信仰によってではなく、必要によって救われる」「人から愛されたいと思うなら、人を愛しなさい」「徳と幸せは母と娘」「この世で最も尊いのは、この世で自分がどんな善行をすることができるかという問いだ」という具合である。平等主義と民主主義の表白も、暦の格言の中に多々見られる。「脚で立つ農夫は、跪くジェントルマンより背が高い」「王様のチーズの半分は削り取られてしまう。でも、いいじゃないか。チーズは人民のミルクから出来るのだから」「泥棒は高く吊るされ、小者は絞首台の木柁に嵌められる。偉い人たちが王座に就くとき、君や僕はどうなるの」という具合である<sup>(106)</sup>。

フランクリンは毎年の『貧しいリチャードの暦』に序文を書いたが、最終号となった1758年の暦では「勤労と節約」に関する格言をまとめて一つの物語にして序文とした。これがのちに切り離されてパンフレットになり、『富への道』と題されて広く読まれた<sup>(107)</sup>。本論文の冒頭で検討したヴェーバーの「資本主義の精神」との関連では、3つの点に留意する必要があるだろう。第1に、「勤労と節約の勧め」は古今東西、どこにでも見られる通常道徳の一つだ、ということである。だから、ヴェーバーの議論との関係では、フランクリンの「勤労と節約の勧め」が近代資本主義にとりわけ適合的な形で提起されているかどうか、が問題となるのだ。

第2に、しかし、フランクリンの「勤労と節約の勧め」はヴェーバーの想定とは異なって、個人主義的でもなければ、盲目的な利潤追求のエートスでもない。フランクリンは「13徳の樹立」を語る時に、「勤労」について次のように説明した。「時間を浪費するな。常に何か役に立つ useful ことに従事せよ。無用な行ないはすべて断つべし<sup>(108)</sup>」。このように、フランクリンは利潤追求のための勤労ではなく、「役立つ」ことに勤労せよと説いたのだ。もちろん、「役立つ」とは自分だけのためではなく、社会のためのものでもある。後に見るように、フランクリンはフィラデルフィアの公共事業のために多大の貢献をした。彼の科学研究も人々の役に立った。フランクリンの「勤労」の目的が「個人的な利潤追求」ではなく、自分と社会に「役立つこと」にあった、という認識は重要である<sup>(109)</sup>。実際、フランクリンは1756年の『貧しいリチャードの暦』の中では、「賢い人は、正当に手に入れ、冷静に使い、喜んで分け、満足して残す以上のものを欲しない」という金言を挿入している<sup>(110)</sup>。また「節約」について、彼は「13徳の樹立」のなかで次のように説明した。「人と自分に役に立つ do good ののではないことにカネを出すな。すなわち浪費するなかれ<sup>(111)</sup>」。これも、単なるケチの勧めではない。裏返せば、人の役に立つことにはカネを出せ、と言っているのだから。

第3に、フランクリンの「勤労と節約の勧め」の意味は、当時のアメリカの植民地社会の背景の中で捉えられるべきである。当時のアメリカの社会は「中産階級の純粋培養的な社会」などではなかった。植民地アメリカは奴隷制の社会であり、奴隷は人口の一割を占めていた。また、労働者の中のかなりの部分が不自由身分の年季奉公人であった。他方で、植民地社会の中の大地主は、労働することなく余暇を享受する貴族的な生活を送っていた<sup>(112)</sup>。このような社会の中で、

「自分と人々のための勤労と節約」を奨励することは、中流の商工業者や自作農たちに対する激励の意味を持った<sup>(113)</sup>。さらに言えば、ペンカックが指摘するように、『貧しいリチャードの暦』は全体として、資本家的な徳を宣言したのではなく、むしろ、中流層の大衆に科学、文化、歴史の知恵の恩恵を伝え、彼らがそのような問題を議論する公共圏を準備した、という意味を持ったのだ<sup>(114)</sup>。

フランクリンは暦以外にも、自分が発行した『ペンシルヴェニア・ガゼット』紙を大衆啓蒙の手段として利用し、さらに必要に応じて他の新聞・雑誌、またパンフットをも利用した。題材ごとに幾つかを列挙しよう。

まずフランクリンの電気に関する実験と考察に関する諸論文は、イギリスのフォザギル博士とコリンズ氏の計らいで1750年に『ジェントルマンズ・マガジン』に掲載され、また単一のパンフレットとして販売された。他方、稲妻が空気中の放電現象であることを証明した実験は、彼自身が発刊した『ペンシルヴェニア・ガゼット』1752年10月19日号に「嵐の実験」という表題で掲載された<sup>(115)</sup>。フランクリンが初めて経済問題を扱った『紙幣の性質と必要』と、労働価値説を人口問題と関連させて展開した『人類の増加、諸国の人口などに関する考察』はいずれもパンフレットのかたちで、それぞれ1729年と1751年に発表された。また、彼がイギリスに在った1766年には、「小麦の価格および貧乏人の取り扱い論」と「質問集」が『ザ・ロンドン・クロニクル』紙に、「働く貧乏人論」が『ザ・ジェントルマンズ・マガジン』の1768年4月号に掲載された<sup>(116)</sup>。

フランクリンがフランスで書いたアメリカ事情論として有名なのが「アメリカに移住しようとする人々への情報」と「北アメリカの野蛮人に関する寸言」である。前者は独立自営農民の国としてのアメリカという幻想を生み出すのに貢献し、後者はインディアンに関する偏見を正そうとしたものであったが、両者は『二つの小論』として纏められ、ロンドンで1782年に出版されて、広く読まれた<sup>(117)</sup>。魔女についての迷信を風刺した「マウント・ホーリーの魔女裁判」は、彼自身が発行した『ペンシルヴェニア・ガゼット』紙の1730年10月22号に掲載され、宗教的熱狂から起こる蛮行を批判した『ランカスター郡における最近の大虐殺』は1761年1月にパンフレットのかたちで発表された。フランクリンはフィラデルフィアでは黒人奴隷を所有していたが、フランス滞在中に完全な奴隷制反対論者に変身した。『ペンシルヴェニア・ガゼット』の1790年3月23日号に掲載された「奴隷売買論」は、奴隷制擁護論を痛烈に皮肉ったものである<sup>(118)</sup>。

大規模なアソシエーションを組織するために、フランクリンはパンフレットを刊行して世論を喚起した。『アメリカにおけるイギリス植民地の間に役立つ知識を増進させるための提案』(1743年)は「アメリカ学術協会」の設立のために、『明白な事実』(1747年)はペンシルヴェニア防衛のために義勇軍を組織するための提案であった<sup>(119)</sup>。高等教育機関の設立は『ペンシルヴェニアにおける青年教育に関する提言』(1749年)と題するパンフレットの中で提起され、火事につ

いて大衆を啓蒙する目的で『ペンシルヴェニア・ガゼット』紙 1735 年 2 月 4 日号に掲載された「町を火災から守ることについて」は消防組合結成の先駆けとなった<sup>(120)</sup>。

フランクリンが植民地の議員として、また、後にはイギリスへの使節やフランスへの使節として政治活動に献身した時期には、イギリスの植民地政策を批判し、あるいは痛烈に皮肉った記事を、新聞や雑誌に掲載した。イギリスが植民地に犯罪者を流刑にする政策を批判した「植民地への悪漢の輸出」は『ペンシルヴェニア・ガゼット』紙の 1751 年 5 月 9 日号に掲載された。他方、『パブリック・アドバイザー』の 1773 年 9 月号に掲載された「大帝国が小国に衰亡する法則」と、同誌に同年 10 月号に掲載された「プロシヤ王の勅令」は、いずれもイギリスの植民地政策を痛烈に批判したものであった<sup>(121)</sup>。

### iii) アソシエーションと公共事業

フランクリンの啓蒙主義的な社会活動の土台となったのは、「ジャントー」と名づけられた 10 数名からなる秘密結社であった。彼は、ロンドンからフィラデルフィアに戻り、キーマーに雇われたのちの 1727 年秋、つまり 21 歳の時に、有能な知人の大部分を集めて、相互の向上を図る目的でこのクラブを組織し、金曜日の晩を集まりの日とした。フランクリンは『自伝』の中で「ジャントー」の規則について次のように説明している。「会員はすべて順番に、倫理・政治ないしは自然科学に関する何らかの点について少なくとも一つの問題を提出し、仲間の討論にかけることになっていた。また 3 カ月に 1 度は何であれ、自分の好きな題目について論文を書き、それを提出して読むという約束であった」。また、討論が、議論のための議論にならず、建設的なものとなるように配慮が行われた<sup>(122)</sup>。つまり「ジャントー」は会員相互の知的能力向上のための勉強会のように紹介されている。

しかし、1732 年にフランクリンが作成した会則の詳細を見ると、「ジャントー」の目的が多岐に亘ることが解る。まず、会員は会合に備えて 24 に亘る質問に目を通さなければならない。それらは①歴史、道徳、詩、自然科学、旅行、機械技術その他の知識に関する本など、②討論するにふさわしいテーマ、③商売に失敗した町の人の情報、④商売繁盛の町の人の情報、⑤町の金持ちの蓄財方法、⑥模範となる町の人と、真似すべきでない人の例、⑦不節制、悪徳、愚行の例、⑧節制、分別、中庸などの美德によって、幸福になった人の例、⑨病氣、怪我、その治療法、⑩旅行や航海に出る人の情報、⑪人類、母国、友人、仲間に役立つことについてのアイデア、⑫新しく町に来た立派な人についての情報、⑬最近仕事を始めた立派な人、⑭修正の必要がある法律の文言、⑮人民の権利が最近侵害された例、⑯自身の評判が攻撃された情報、⑰自身が親交を結びたい人に関する情報、⑱仲間の評判が攻撃された情報、⑲仲間に危害を加えられたという情報、⑳会に対する会員の援助要請、㉑会に対する会員の助言要請、㉒会員以外からの恩恵についての情報、㉓正義・不正の判断に困る事柄、㉔「ジャントー」の運営についての要望、の 24 点である<sup>(123)</sup>。



まず①と②は会員の知的向上を、⑥⑦⑧は会員の道徳的向上を目的としているが、③④⑤⑩⑬はビジネスに関する情報である。⑯⑰⑱⑲⑳㉑はメンバーの相互扶助と救済のために必要な情報である。⑭と⑮は法律と政治に関する情報であり、⑪は社会的貢献のためのアイデアである。また、会則の中には会員の4つの誓いが示されている。第1に、会員仲間を尊敬すべきこと、第2に、職業や信仰を問わず、全ての人を愛すること、第3に、思弁的持論や礼拝形式のゆえに、ある人の身体、名声あるいは財産に危害を加えようと思ってはならないこと、第4に「真理のために真理を愛し、自らそれを見出し、取り入れ、またそれを他人に伝えるために、陰・日向なく努めること」である<sup>(124)</sup>。ここにはフランクリンの「有神論的大局観」に基づく宗教的相対主義が表明されている。

フランクリンはこのようなアソシエーションの組織をどのようにして考え出したのだろうか。この問題についてはいろいろな説があるが、1つではなく、少なくとも4つの要因が指摘できる。第1に、前述のように、フランクリンはロンドンで幾つかのクラブに出入りしていた。したがって彼は、アソシエーションの組織の在り方や運営の仕方を知ることができたはずである。第2は、彼が少年時代に読んだコットン・メイザーの『ボニファキウス：善行論』（1710年刊）の影響である。『善行論』はピューリタンの実践指導所であるが、その末尾では、人々の道徳改善のための「改革協会」が取り上げられていた。また、「改革協会」が会合を持つ場合に朗読すべき「考慮すべき項目」が、その中で列挙されている。この形式はフランクリンのジャントー・クラブのそれと類似している<sup>(125)</sup>。

第3は、同じく彼が少年時代に読んだダニエル・デフォーの『プロジェクト論』（1697年刊）の影響である。17世紀末以後のイギリスでは、様々なプロジェクトの試みが雨後の竹の子のように次々と現れていた。デフォーはそのような現実を踏まえて、銀行、憂慮道路、病院、図書館、中等・高等教育機関、そして共済組合 friendly society などの設立について論じた。フランクリンが組織した「ジャントー」、およびこれを基盤として彼が設立した図書館、学術協会、病院、高等教育機関などは、デフォーの構想の射程の中にあっただと言えよう<sup>(126)</sup>。第4は、1720年に刊行されたジョン・ロック著作集に収められた「協会規則」の影響である。その長い表題「メンバーが役立つ知識についてより多く深く知るため、また真理とキリスト教的博愛を推進するために、毎週に一度会合する協会の規則」は、協会の性質を言い表している。また、この中で明記された会員の3つの誓いが、「ジャントー」の会員の4つの誓いとほぼ全く同じであることも興味深い<sup>(127)</sup>。ルメイはフランクリンがロックの1720年版著作集を持っており、それを読んだことは明らかだ、と述べている<sup>(128)</sup>。

ところで、「ジャントー」に対するコットン・メイザー『善行論』の影響をとりわけ強調する説があるが、これは正しい主張であろうか。メイザーはニュー・イングランドのカルヴァン主義の指導者の家族に生まれ育った。17世紀から18世紀初めにかけてニュー・イングランドでは、カルヴァン主義神学者は絶対的な権威をもっていた。彼らは回心の形態を定義し、再生の体験が

本物か否かを判定する権能を持っていた。彼らは「神のことば」について説教し、神への道を教え、恩寵をもたらす補助者として奉仕した。彼らは自分たちの共同体の道徳的番犬であり、邪悪な行いを叱り、善行を勧めた。また彼らは、当時であって最も学識ある人々であった。しかし、18世紀初頭にニュー・イングランドに侵入してきた啓蒙主義思想は、カルヴァン主義聖職者たちの道徳的・知的権威にとって大きな脅威となった。人間の生涯の意味を「神の絶対的権威の賛美すること」とし、救済についての二重予定、原罪論、人間理性の無力さを強調するカルヴァン主義の神学に、啓蒙主義は真っ向から対立するからである<sup>(129)</sup>。

しかし、インクリーズ・メイザーとその子コットンは、この2つの世界観を結び付けようとした。インクリーズとその仲間は1683年に博物学研究のための私的な哲学協会を設立し、コットンはカルヴァン主義神学を合理主義的に再解釈しようとした<sup>(130)</sup>。コットン・メイザーの『善行論』で提起された「改革協会」はフランクリンの「ジャントー」に形式的に類似した部分がある。しかし、両者の内容は大きく異なる。「改革協会」の会合において会員に注意を喚起する「考慮すべき項目」は社会的秩序の維持・改善を趣旨とするものであった。また改革協会は慈善活動や、学校設立などの公共事業にも携わった。その根本思想はキリスト教の「隣人愛」の勧めであった。「ジャントー」の場合にも、最も重要な課題は人類社会への貢献という高邁なものであったが、他方では、会員の相互扶助、「役立つ知識」の推進、経済情報の収集といった世俗的な目的も設定された。また、「ジャントー」は宗教信仰を異にする会員たちからなる、秘密結社なのであった。

この意味では、「ジャントー」はメイザーの「改革協会」よりは、フリーメイソンのロッジにより近いものであった。フリーメイソンは中世ヨーロッパで生まれた秘密結社であるが、18世紀初頭に啓蒙主義の思想を吹き込まれて、生まれ変わった。ジェイコブによれば、優れた人々 meritorious の兄弟団 fraternity であるフリーメイソンは、団員の文芸と教育と礼節を改善するよう奨励し、図書館や読書会を持つこともあり、科学教育を推進した<sup>(131)</sup>。フリーメイソンは自治的な組織であり、規約、選挙・代表制度、儀式を持っていた。文化的神話と倫理的プログラムをもち、善行を通して社会全般を改善する事業計画も持っていた<sup>(132)</sup>。もちろん、「ジャントー」には独特の文化的神話や儀式はなかった。また、1731年にセント・ジョン・ロッジに加入するまで、フランクリンはフリーメイソンについてあまり知識を持っていなかった<sup>(133)</sup>。実際には、フランクリンはその理想とする結社を組織する過程で、「ジャントー」が結果的にフリーメイソンのロッジに似たものになってしまったのであろう。

「ジャントー」は大変有益だったので、会員の中には友人を加入させたいと望む者も出てきた。しかし、フランクリンは「ジャントー」の会員数を12名と決めていた上に、この会は秘密結社であったので、彼は従属クラブを作ることにした。つまり、各会員が、問題の提出その他「ジャントー」と同様な規則を持つ従属クラブをめいめい創設できることとし、「ジャントー」との関係は知らせないでおく、というものであった。その結果、5つないし6つの従属クラブが成

功裏に運営された。これらの従属クラブができたために、フランクリンらのさまざまな企画が実現し易くなったのである<sup>(134)</sup>。

フランクリンの印刷所の創業時に、「ジャントー」のメンバーの助力が決定的に重要であったことはすでに述べたが、「ジャントー」からは、様々な公共事業が生まれて発展していった。第1が1731年に設立された会員制図書館である。フランクリンが草案を作り、公証人に定款を作成してもらい、「ジャントー」の友人たちの援助によって50名の会員を得た。会員は入会時に各40シリング、以後50年間毎年10シリングずつ出す規則であった。この図書館の会員が100名を超えた時点で、法人格を得て、永続的な存在になった。フランクリンは、これが北アメリカの様々な会員制図書館の元祖であり、アメリカ人全体の知識水準を高め、平凡な商人や農民の教養を深めて、諸外国のたいていの紳士に劣らぬものに仕上げたのは、これらの図書館である、と自慢している<sup>(135)</sup>。第2は、アカデミーである。フランクリンは「ジャントー」の仲間を中心に、友人を集めてその推進母体を作り、パンフレットを書いて世論を喚起し、寄付金を募集し、評議員を選出して1751年にアカデミーを創立にこぎつけた。評議会はしばらくして知事の許可を得て、法人組織となった。これが今日のペンシルヴェニア大学の前身である<sup>(136)</sup>。

第3は市の夜警制度である。フランクリンは現行の夜警制度の不備を指摘し、「ジャントー」でより合理的な方法を提起した。この案は「ジャントー」と従属クラブのメンバーの努力によって法律化された<sup>(137)</sup>。第4に、フランクリンは火災の諸原因とそれに対する予防策を「ジャントー」で論じたが、その評判が良いので、これを『ペンシルヴェニア・ガゼット』に掲載した。これが基となって、ユニオン消防組合というヴォランタリーなアソシエーションが結成された。その結果、火災を初期段階で消し止める設備と態勢が整備され、フィラデルフィアは火事に対して強い街になった<sup>(138)</sup>。

フランクリンはまた、「ジャントー」を直接介することなく、さまざまな公益事業を発起し、推進した。第1は1744年の哲学協会の創立であるが、これについては次節で論じよう。第2は義勇軍の設立であって、フランクリンはこれを民間のヴォランタリーなアソシエーションとして発起し、多くの市民の賛同を得て発足させた<sup>(139)</sup>。第3に、フィラデルフィアで初めての篤志病院を設立するというトマス・ボンド博士の企画にフランクリンは賛同し、寄付金集めや法案成立のために知恵を絞った。法案は無事に成立し、「便利で立派な建物が建てられたが、この病院はその後たえず利用されて社会に役立ち、今日なおも繁栄を続けている」とフランクリンは述べている<sup>(140)</sup>。またフランクリンはフィラデルフィアの道路清掃のシステムの改良に尽力し、街路舗装と照明の設置を法令化するよう尽力した<sup>(141)</sup>。この件に関してフランクリンは「人間の幸福というものは、時たま起こるすばらしい幸運よりも、毎日生まれるいろいろな小さな便宜から生まれるのである<sup>(142)</sup>」という。ここに、彼の啓蒙主義的な「幸せのための改善」の思想が現れている。

フランクリンは友人や「ジャントー」の仲間の協力を得ながら、率先して「市民生活を著しく

快適なものにし、フィラデルフィアの中流層の住民のために「市民社会」を作り出す手助けをした。ひとつ一つはおそらく小さな事柄だったのだろうが、しかしどれもが、人間の幸せや満足に寄与しようと思図されたことであった。そして、それが結局、18世紀の啓蒙運動が目指すところであったのだ<sup>(143)</sup>」。

#### iv) 科学と教育：産業的啓蒙

フランクリンは数学は苦手だったが、若いころから科学研究には大いに興味を持っていた。彼は科学の専門知識を得るために、ニュートンの『光学』（1704年）やニュートン科学の大衆への普及に尽力したデサグリエの『実験哲学コース』（1734～44年）を勉強して、F・ベーコンやニュートンの後継者を自認していた<sup>(144)</sup>。フランクリンは1748年に実業生活から身を引いて、利子生活者の有閑階級の仲間入りをしたが、フランクリンの引退への重要な要因となったのは、電気への情熱であった。そのきっかけは、スコットランドから来たスペイン博士の電気の実験を、1746年に見たことであった。フランクリンはスペイン博士の実験器具のすべてを買い取った。また、ロンドン王立協会の会員P・コリンソンがフィラデルフィアの会員制図書館に電気実験用のガラス管と仕様書を送ってきた。フランクリンはひたすら電気を研究し、また電気と戯れた。彼はコリンソンに、自分のアイデアや実験の報告を少しずつ書き送った。それがフォザギル博士の眼にとまり、1751年に『電気にかんする実験と観察—アメリカ・フィラデルフィアで行われた』というパンフレットに纏められた。彼の理論に最も興奮し、最初にその理論を実験して成功したのはフランス人であった。こうしてフランクリンは、一躍、国際的な名士となった<sup>(145)</sup>。

フランクリンは、電気を粒子 particles からなる微妙な流体、ないし伸縮自在な物体であると見た。物体が異なった種類の電気を生み出すのではなく、物体が正と負のバランスのとれた粒子をもち、あるいはこのバランスの上下で電荷をチャージされる。この電荷は、新たに創り出されたり、全く失われたりすることは無い。その構成が変わるだけである、というのがその電気理論の中心的な命題であった。そしてフランクリンは自信をもって、種々の新たな定義と新たな用語を導入した。Battery（電池）、プラスとマイナス、正と負、charge（充電）、discharge（放電）、storage（蓄電）、electrify（帯電させる）などである。彼は電気が、水や「エーテル」と同じように、すべての物質に浸透して全く静かに存在する、と繰り返し教え、静電気に関するさまざまなショーと実験を行なった。また、凧に釘を取り付けて感電させて、その流体説を証明した。また、蓄電池や避雷針を発明した<sup>(146)</sup>。

自然科学の分野の発明は、ほとんどが人々の生活には役立たない。しかし、フランクリンは光学研究の成果として遠近両用メガネを発明し、また1742年にオープン・ストーヴも発明した。当時の暖炉は熱効率が悪く、煙突が掃除されてないと室内が煙った。フランクリンがペンシルヴェニア・ストーヴと名づけたものは、新しい空気が入ってくると温まる仕掛けになっていたの



で、効率よく室内が暖まり、燃料が節約できた<sup>(147)</sup>。

前述のように、フランクリンは1749年に『ペンシルヴェニアにおける青年の教育に関する提案』と題するパンフレットを出版して、アカデミーの創立の必要性を訴えた。興味深いのは、その教育内容である。彼は「勉強については、……最も役に立ち、最も装飾的 ornamental であるようなこと」を提案する。具体的には、習字と絵画、そして算術、会計、幾何学、天文学の初歩、英文法と英作文、歴史、地理学、年代学、道徳、雄弁術、博物学、商工業の歴史などであって、歴史学は様々な人文・社会の分野の基礎となるものとして重んじられる。外国語は必須科目ではなく、専攻に応じて学生が自由に選べるシステムが提案される。例えば神学志望者はラテン語とギリシャ語、法律志望者はラテン語とフランス語、商人志望者はフランス語とドイツ語とスペイン語を学ぶべきだとされる。また、情操教育として、たえず心の優しさ benignity of mind を説き聞かせ、陶冶しようとする。さらに、青年たちに、人類、祖国、友人と家族の奉仕しようとする性向と能力にこそ真の価値があることを銘記させよう、という<sup>(148)</sup>。

ここで注意すべきは、実学を重視するこのようなフランクリンの教育プログラムが、当時のイギリスの常識から見ても、アメリカ植民地の基準から見ても、革命的だったということである<sup>(149)</sup>。したがって、この計画は多数の「寄付や賛助をしてくれるはずの、富と教育を併せ持った人々」によって挫かれてしまった。英語教育機関という当初の計画が、紳士階級の子弟たちを大切にす伝統的なラテン語学校に変えられてしまうと、フランクリンは、自分の本来の意図を満たすことを期待できる別個の英語学校を作らなければならなくなったのである<sup>(150)</sup>。

他方、アメリカ哲学協会は1744年に設立されたが、その前年にフランクリンが書いた趣意書はその性格を明らかにしている。彼は、植民地においても「技芸を陶冶し、皆の知識の蓄えを増進する余暇」を持つ人々が多数生まれてきており、彼らの様々なアイデアを検討、追究、向上させれば、植民地全体、あるいは全人類の役に立つ発見が生まれるかもしれない、という。そこで、植民地に散らばるヴァーチュオーゾ（有閑知識人）の情報交換機関としてアメリカ哲学協会を設立するのである。フィラデルフィアに本部を置き、そこには総裁、出納役、書記、及び、少なくとも7人の常任委員を置く。7人は医学、植物学、数学、化学、機械工学、地理学、自然哲学のそれぞれの専門家である。協会会員は意見や発見、実験結果を伝えあい、絶えず寄稿する。常任委員はそれらに應對し考察し、また他の会員に照会する。また、会員の会合を設定し、年末には「公益になると考えられる実験、発見、改良を纏めて編集し、印刷に付す」ことが明記された<sup>(151)</sup>。

アメリカ哲学協会は、イギリスのロンドン王立協会と違って、ヴォランタリーで私的で、オープンな組織であった。それは「物質の本質に光をあて、物質に対する人間の支配力を増し、生活の便宜や楽しみを増大させる」ことを趣旨としていた<sup>(152)</sup>。以上のように、アメリカ哲学協会は、とりわけ人々の知識や技芸の改善と、社会に「役立つこと」の追求を趣旨とする「産業的啓蒙」のための機関だったのである。



## おわりに：フランクリンと近代社会の成立

ヴェーバーはフランクリンが書いたパンフレット『若き商工業者への助言』から、「自分の資本を増加させることを自己目的と考えるのが各人の義務だ、という思想」ないし、幸福主義や快楽主義と対立して「一切の自然的な享楽を厳しく斥けて、ひたむきに貨幣を獲得するよう努力すべき」だという思想を読み込んで、これを「資本主義の精神」と名づけた。フランクリンの思想のこのような理解が完全に間違っていることが、いまや明らかになった。『若き商工業者への助言』は、これから商工業者として自立する若者に対して、古今東西の職業訓を手際よく纏めて説き、奮闘を促すものなのであり、それ以上のものではない。それは、ヴェーバーが考えるような個人主義的で変執狂的な教えではなかった。

フランクリンは青年の高等教育機関の設立を提案したパンフレットの中では、若者に「人類、祖国、友人と家族に奉仕することが真に価値あること」だと教えなければならない、と説いた。またフランクリンが自らの道徳的改善のために樹立した「13徳」のなかでは、「勤勉」を「常に役立つことに従うべし」と説明している。金儲けに専心せよ、とは言っていないのである。また「節約」については「自分や人々に役立つことにはカネを使うな」と説明している。逆に言えば、人々の役に立つことには、カネを惜しむな、と言っているのだ。フランクリンが20歳代初めに仲間と一緒に設立した秘密結社「ジャントー」の目的は、会員相互の知的能力の研鑽や相互扶助ばかりでなく、「人類、祖国、友人、仲間の役に立つこと」への奉仕にもあった。フランクリンが30歳代末に設立した「アメリカ哲学協会」の目的は「生活の便宜や楽しさを増大させるようなすべての哲学的試み」を振興することにあつた。彼が率先して、「ジャントー」仲間や友人の協力を得て設立した会員制図書館、ユニオン消防組合、街路舗装と照明といった様々な公共事業、また、科学の実験と諸発明も、人々の幸福を増進させる、自分と社会の改善の努力の結果だった。フランクリンがその生涯をかけて追求したのは、自分と人々の幸せのための改善だったのである。

フランクリンのこのようなエートスは「産業的啓蒙主義」である。モキアは「産業的啓蒙主義」を「自然現象についての人間の知識の増大を通して、また、それを生産活動に利用できる人々に伝えることを通して、物質的進歩と経済発展が達成されると信じるイデオロギー」と定義する<sup>(153)</sup>。これまで見てきたように、フランクリンのエートスは、まさにそのようなものであった。それは、キリスト教的なエートスとは繋がりが無い。啓蒙主義は、人間の究極的な問いを宗教的「救済」から現世的「幸福」に変えた<sup>(154)</sup>。キリスト教の価値観は神中心の宗教的価値観であるが、啓蒙主義のそれは人間中心の世俗的価値観である。キリスト教徒が求める幸せは「来世の幸せ」であるが、啓蒙主義者のそれは人々の「現世的な幸せ」である。キリスト教徒が現世で推進するのは「キリストの福音」を広めることであって、社会の進歩や改善は眼中にない。しかし、啓蒙主義者にとっては自分と社会の改善と進歩こそが社会活動の目的なのである。フランク

リンはカルヴァン主義の家庭に生まれて育ったが、すでに10代中ごろには啓蒙主義に親しみ、ロンドンでの修業時代に啓蒙主義の真髄に接して、その後啓蒙主義者として成長していった。彼は、北アメリカにおける啓蒙主義的な「公共圏」の出現にとって中心的な役割を演じた。そのような意味で、彼はアメリカにおける近代社会の成立に大きな貢献をしたのである。

経済史的にいえば、フランクリンの産業的啓蒙主義のエートスは、工業化のための前提を作り出したが、工業化社会を生み出さなかった。その原因の一つは、彼が製造業者ではなかったことにある。彼は科学者であり、政治家であり、出版印刷業者ではあったが、製造業者ではなかった。しかし、彼の努力が直接の工業化に結び付かなかった本当の原因は、アメリカの社会の未成熟にある。アメリカがイギリスからの独立を宣言したのは、彼が70歳に達した時だった。その当時は、アメリカの社会には工業化社会を生み出すのに十分な数の「産業的啓蒙主義」のエートスに満たされた科学者、技術者、製造業者は存在しなかった。それが存在したのは、イギリスにおいてである。イギリスでは17世紀後半に科学革命が展開するとともに、市民社会が生まれて国内と海外の商業が大発展を遂げていた。そのような「制度的発展」と技術の発展が「命題的知識」の内部のあり方を変化させて、1700年頃から1850年頃までに「知識の共同体」を生み出していった。つまり、知識人 Savants と技術者 fabricants との自由な交流が大規模に展開した。自然科学と技術は「役立つ知識」によって結びついた。それが産業革命を生み出したのだ。この点については、さらに別稿において、詳しく論じる予定である<sup>(155)</sup>。

最後に、もう一度マックス・ヴェーバーの「資本主義の精神」について論じよう。本稿において明らかになったように、彼のいう意味での「資本主義の精神」はフランクリンにおいては存在しなかった。それだけではなく、他のどのような思想家や科学技術者にも見られないであろう。それはむしろ、資本主義が体制的に確立したのちに、経営者や労働者が資本主義のシステムに対応せざるを得なくなったために、生まれてきたのである。資本主義を成立させた精神的原動力は「産業的啓蒙主義」のエートスなのであり、「資本主義の精神」ではなかった。それは資本主義が確立してから、それへの対応の産物として生まれたのだ<sup>(156)</sup>。

したがってまた、ヴェーバーのいう「職業義務の思想」は、産業革命以前には存在しなかった。西ヨーロッパの職業観の重要な変化は、「世俗的職業が聖職と同等に宗教的に価値がある」という思想の登場であり、これは16世紀前半の宗教革命前後に生まれた。例えば、エラスムスの『愚神礼讃』にはそのような考え方が表明されている。また、聖職を表わすドイツ語の Ruf や Beruf,あるいは英語の calling が宗教改革前後に使われ出したのも、そのような意味においてである。しかし、それらは「職業義務の思想」などというものとは関係が無い。また、「プロテスタントの職業倫理」は、資本主義を推進する役割を果たしたのではなく、むしろ社会の資本主義的發展への「対応」として生まれてきたものである。つまり、資本主義の荒波が都市や農村に押し寄せる中で、信徒たちを守るためにピューリタン牧師たちは、勤労、節約、誠実といった禁欲的職業倫理を説いた。だが、聖職者としては当然のことであるが、彼らはその職業倫理を信徒の

宗教的な「救い」と結び付けることはしなかった。社会学的観点から、その両者を結び付けて考えようとしたところに、ヴェーバー「倫理」テーゼの精髓と、したがってまた、最大の問題点がある。この点の検討についても、私は別稿に譲りたいと思う。

#### 注

- (1) Max Weber, Die protestantische Ethik und der »Geist« des Kapitalismus, *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, Bd. 1, SS. 17~206, 1920, M・ヴェーバー, 1989, 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』大塚久雄訳, 岩波書店(文庫)
- (2) Benjamin Franklin, Advice to a young tradesman, in *The Papers of Benjamin Franklin*, 38 vols. to date, L. W. Labaree, et al. ed., New Haven, Yale University Press, 1959~, (以下, *Papers*, と略記) vol. 3.
- (3) ヴェーバー, 1989, 43~48 頁
- (4) フランクリンが偽名で文章を執筆し, 「仮面」を被ることを好んだ, という側面については, Zukerman, 2012; Weinberger, 2012 などを参照せよ。
- (5) Moses, 2008, p. 136.
- (6) Kelleter, 2008, pp. 87~88.
- (7) ウッド, 2010, 12 頁。
- (8) Houston, 2008, Chapter 1
- (9) 梅津順一は, しかしむしろ, 17 世紀後半イギリスの王政復古期に活躍したピューリタン牧師リチャード・バクスターの研究者として, 知られている。
- (10) 梅津順一, 2012(b).
- (11) フランクリン, 1957, 138 頁 (Franklin, 1964, p. 135), フランクリン, 1957, 170~172 頁 (Franklin, 1964, pp. 157~158)。後者の方でフランクリンが言うように, この小冊子は, 結局, 書かれなかった。自伝の第二部, つまり, 「13 徳の樹立」に関する説明は, その代わりに書かれたのである。
- (12) Mokyr, 2002, p. 43
- (13) 『回想録』は 3 回に亘って書き継がれた。1757 年 (フランクリンは 51 歳) にフランクリンはペンシルヴェニアの領主ペン家の人々に固定資産税の支払いを認めさせるためにペンシルヴェニア植民地議会の命を受けてイギリスに渡った。領主がそれを了承しないので, 彼は同植民地を王領植民地にするべく議会工作を行った。その結果, 彼はイギリスの多くの国会議員の知己を得た。1768 年頃にイギリスで官職を得る可能性が出てきたが, 彼は政治的な賭けに出て失敗し, その展望を失った。傷心のフランクリンはイギリス周遊の旅に出て, スコットランドで「回想録」の第 1 部を執筆した。彼はイングランドに連れてきた息子ウィリアムを読者として想定し, 自分の先祖, 家族, そして自分の 25 歳ごろまでの生涯を赤裸々に綴った。しかし, イギリスの政界の事情が彼にとって突然好転したので, 彼はそこまでで筆を置いた。その続きとなる第 2 部をフランクリンが書いたのは, 1784 年 (フランクリンは 78 歳) である。彼はアメリカ合衆国の対フランス特任公使としてフランスとの同盟を克ち得た。イギリスは合衆国との講和条約が締結したので, フランクリンは本国から召還されるのを待っていた。彼は, パリ郊外のパッシーに住んでおり, 友人ベンジャミン・ヴォーンからの催促に力を得て「13 徳の樹立」についての詳細を執筆した。翌年フランクリンはアメリカに戻ったが, 政敵に半耳られたアメリカ連邦会議は, これまでのフランクリンの政治的努力に対して感謝の念を示すことが無く, 報奨を全く与えなかった。1788 年に彼は, 失意と怒りの念をこめて, 慈善活動や公的活動における自分の業績を詳しく記した文書を作成するとともに, それらを「回想録」の第 3 部として執筆したのである (ウッド, 2010, 167~172, 245~249, 270~275 頁)。なお, Arch, 2008 と Seavey, 2011 をも参照せよ)。フランクリンの原稿や書類の一切は, 孫のテンプル・フランクリンに贈与されたが, テンプルが自伝や著作集を出版するより前に, 回想録の第 1 部がフランス語

に訳されて出版され、それがまた英訳された。テンブルは市場価値を高めるためにフランクリンの原稿に手を加えて出版し、それをまた、伝記学者スパークスが加筆修正した。このようなわけで『自伝』の底本は複数存在する。ここでは一番広く利用されている *The Autobiography of Benjamin Franklin*, ed. by L. W. Labaree, Yale University Press, 1964 を使用し、以下 *Autobiography* と略記する。日本で広く読まれている『フランクリン自伝』松本慎一・西川正身訳(岩波文庫)はスパークス本を基にした訳なので、これとは異なる部分があつた。これは以下『自伝』と略記するが、訳文については、適宜変更を加えた。この岩波文庫版は、2010年12月発行の71刷から活字が変わり、頁数が増加した。

(14) フランクリンは膨大な量の文書や手紙を書いた。その多くが *The Papers of Benjamin Franklin*, eds. by L. W. Labaree, et. al., Yale University Press, 1959~, に収められている。これは現在38巻までが出版されているが、最終的には50巻ほどのものになるということである。また現在では、通常印刷物以外に、インターネットでも閲覧できるらしい。以下では、これを *Papers* と略記する。これ以外に内容が充実した著作集として Lemay, A. Leo, ed., 1987, *Benjamin Franklin, Writings*, Library Classics of the United States が利用できる。以下では、これを *Writings* と略記する。なお、日本語の著作集としては、『アメリカ古典文庫1:ベンジャミン・フランクリン』池田孝一訳、亀井俊介解説、研究社出版、1975が役に立つ。以下では、これを『著作集』と略記する。これについても、略語は適宜変更した。

(15) 梅津, 2010 を参照せよ。

(16) *Autobiography*, pp. 57~63, 『自伝』24~30頁。

(17) C. Mulford, p. 8

(18) ボイル記念講演会については、山本通, 2010 を見よ。

(19) *Autobiography*, pp. 113~114, 『自伝』107頁。

(20) *Autobiography*, p. 71, 『自伝』40頁。

(21) 1722年に書かれた「Silence Dogoodの手紙1~14」である。16歳のフランクリンは初老の寡婦に扮してボストンの世相を皮肉った。SilenceもDogoodも、当時のボストンを代表するコトン・メイザーの著書「ボニファキウス:善を為すの書」を茶化したものである。*Papers*, Vol. 1, pp. 8~45; *Writings*, pp. 5~42. 『著作集』238~250頁ではその1, 4, 5, 7, 12号が訳出されている。その4号は、ハーヴァード神学校とその学生たちのありさまを痛烈に皮肉ったものである。

(22) Waldstreicher, 2011, p. 215. 兄はボストンの新聞紙上で支配層の市政を批判して一時、新聞発行停止処分を受けた。この時に3カ月間、兄の新聞の発行人がフランクリンの名義に変更された。フランクリンが契約期間中の逃亡という犯罪を犯しても平気だったのは、そのような事情3カ月間にもよるのだろう。

(23) Hoffer, 2011, pp. 26~31. 黒人奴隷の数は、1760年には約1,400人だった。ペンシルヴェニアにおいても、他の諸州と同じく、労働者は自由民、不自由な年季奉公人、奴隷からなり、またさまざまな民族・人種からなっていた(Waldstreicher, 2011, p. 216)。

(24) *A Dissertation on Liberty and Necessity, Pleasure and Pain, in Papers*, Vol. 1, pp. 57~71, *Writings*, pp. 57~71. 『著作集』74~87頁。

(25) 『自由と必然』は直接には、宗教と道徳とが同じものであると論じる理神論者ウラストンの『自然の宗教』1722年を批判するものであったが、アンダーソンによれば、フランクリンの議論の背景にはハチソンとマンデヴィルの論争などがあつた。Anderson, 1997, Introduction を参照せよ。『自伝』によればフランクリンは、このパンフレットを公刊したおかげで、『蜂の寓話』の著者マンデヴィル、化学者ベンバートン、大博物館の基礎を築いた博物学者ハンス・スローンの知己を得、彼ら知識人のサークルに入り出すようになった。*Autobiography*, p. 97, 『自伝』82~83頁。

(26) *Autobiography*, p. 114, 『自伝』107~108頁。

(27) Campbell, 2008, pp. 106ff.をも参照せよ。

(28) アンダーソンによれば、1724年末から1年半のロンドン滞在期間は、フランクリンの人間形成にとって決定的な時期であった。彼は自分を道徳家、哲学者、「自由の公共圏」の一員として自覚していた。(D. Anderson, 1997, pp. xi~)

- (29) 1726年にフィラデルフィアに戻る船中でのフランクリンの Plan of Conduct の4つの決心について、詳しくは Anderson, 1997, pp 52~を見よ。
- (30) *Autobiography*, p. 118, 『自伝』114頁。
- (31) Do., pp. 118~119, 『自伝』114~115頁。
- (32) Do., p. 122, 『自伝』120頁。それは、ウィリアム・コールマンとロバート・グレイスであった。
- (33) Zuckerman, 2012, p. 10; Koschnik, 2011, p. 340.
- (34) *Autobiography*, p. 119, 『自伝』115頁。
- (35) *Autobiography*, p. 126, 『自伝』125頁。
- (36) Houston, 2008, pp. 46~49.
- (37) *Autobiography*, pp. 119~120, 125, 『自伝』115~117, 125頁。
- (38) *Autobiography*, pp. 163~164, 『自伝』179頁。
- (39) Green, 1993, pp. 94~107; Hoffer, 2011, pp. 1~9. 二人は宗教思想の上では全く妥協しなかったが、その友好関係はウィットフィールドが天に召されるまで続いた。
- (40) *Autobiography*, pp. 120, 125, 『自伝』117, 126頁。
- (41) *Autobiography*, pp. 126~127, 『自伝』126~127頁。
- (42) *Autobiography*, pp. 172~173, 『自伝』191頁。フランクリンによれば、ブラッドリーが解任された理由は、彼が郵政長官への会計報告をなおざりにしたからであった。彼の更迭後、フランクリンとブラッドリーはお互いの新聞紙上で、激しくお互いを批判しあった。*Papers*, Vol. 2, pp. 235~236, 274~281.
- (43) *Papers*, Vol. 1, p. 311.; *Writings*, p. 1185; 『著作集』36~37頁。Pencac, 2011, p. 276.
- (44) *Autobiography*, pp. 125, 166, 『自伝』125, 182頁。
- (45) *Autobiography*, p. 181, 『自伝』203頁。
- (46) 政商とは「政治権力に癒着し、その御用に応じたビジネスに従事することによって、少ないコストで多くの収益を獲得する者」である。森川英正, 1978, 『日本財閥史』教育社, 24頁を参照。
- (47) *Autobiography*, pp. 123~125, 『自伝』122~124頁。『紙幣の性質と必要』は *Papers*, Vol. 1, pp. 139~157.; *Writings*, pp. 119~135; Houston, pp. 41~46.
- (48) *Autobiography*, p. 171, 『自伝』189~190頁。
- (49) *Autobiography*, p. 172, 『自伝』191頁。
- (50) *Autobiography*, p. 208, 『自伝』238頁。
- (51) *Autobiography*, p. 195, 『自伝』222頁。
- (52) ウッド, 2010, p. 69. フランクリンは、他の植民地の多くの印刷業者と共同経営して利益を分け合っていただけでなく、少なくとも18の製紙工場を次々と建設してもいた。また、人生の大半を通して、フランクリンは土地への投機に深くかかわっていた。
- (53) Moses, 2008, p. 139.
- (54) *Autobiography*, pp. 209~210, 『自伝』240~241頁。
- (55) ウッド, 2010, 113頁以下。
- (56) ウッド, 2010, 第2章, 第3章。
- (57) ウッド, 2010, 第4章, 第5章。
- (58) 山本, 2010,
- (59) Porter, 2000, Chapter 4.
- (60) *Autobiography*, pp. 145~146, 『自伝』153頁。
- (61) Hoffer, 2011, pp. 17, 33~34; Kelleter, 2008, p. 83; Weinberger, 2012, pp. 15~; Aldridge, 1967.
- (62) Articles of Belief and Acts of Religion, in *Papers*, vol. 1, pp. 101~108; *Writings*, pp. 83~90; 『著作集』87~95頁。
- (63) *Autobiography*, p. 148, 『自伝』158頁。
- (64) Walters, 1999, Chapter 3.



- (65) *Autobiography*, p. 146, 『自伝』 153～154 頁。
- (66) *Autobiography*, p. 162, 『自伝』 177 頁。
- (67) *Autobiography*, pp. 161～163, 『自伝』 175～179 頁。
- (68) Isaacson, 2003, pp. 106～107; Shields, 2008, pp. 54～55. ウッド, 2010, 56 頁; Koschnik, 2011, p. 342; Hayes and Bour, 2011, pp. xx-xxi
- (69) *Autobiography*, p. 147, 『自伝』, 155 頁。
- (70) ここでは、ニケア信条はあっさりとして省略された。『著作集』 107 頁。
- (71) 『著作集』 110～111 頁。
- (72) *Autobiography*, pp. 175～180, 『自伝』 195～202 頁。
- (73) *Autobiography*, pp. 190～191, 『自伝』 215～216 頁。
- (74) Walters, 1999, pp. 147～150
- (75) 『著作集』 102～103 頁
- (76) 『著作集』 102～103 頁
- (77) Fea, 2011, pp. 129～145.
- (78) *Autobiography*, p. 114, 『自伝』 108 頁。
- (79) *Papers*, vol.1, p. 103; *Writings*, p. 84; 『著作集』 90 頁。
- (80) *Autobiography*, pp. 167～168, 『自伝』 183～185 頁。
- (81) *Writings*, pp. 425～427; 『著作集』 95～96 頁。
- (82) Walters, 1999.
- (83) ウッド, 249 頁。
- (84) *Autobiography*, p. 119, 『自伝』 116 頁。
- (85) *Autobiography*, pp. 87～88, 『自伝』 66～67 頁。
- (86) *Autobiography*, p. 128, 『自伝』 129 頁。
- (87) Walters, 1999, chapter 5.
- (88) *Autobiography*, pp. 149～153, 『自伝』 157～163 頁。
- (89) *Autobiography*, pp. 153～154, 『自伝』 163～164 頁。
- (90) イエスが弟子たちに教えた祈りは、次のようなものである。「天におられる私たちの父よ、御名が崇められますように。御国が来ますように。御心が行われますように、天におけるように地の上にも。わたしたちに必要な糧を今日与えてください。わたしたちの負い目を赦して下さい、わたしたちも自分に負い目のある人を赦しましたように。わたしたちを誘惑に遭わせず、悪い者から救ってください」。新約聖書『マタイによる福音書』6章9～13節。訳文は「新共同訳」による。
- (91) *Autobiography*, p. 156, 『自伝』 169 頁。
- (92) Anderson, 2008, pp. 24～25.
- (93) *Autobiography*, p. 158, 『自伝』 172 頁。同様の思想は、*Autobiography*, pp. 114～115, 『自伝』 108～109 頁でも語られる。
- (94) Gay, 1966; Gay, 1969;
- (95) ユルゲン・ハーバーマス, 1994, 『公共性の構造転換』第二版, 細谷貞雄・山田正行訳, 未来社。
- (96) Outram, 1995, chapter 1; Shields, 2008, pp. 50～61, Mokyr, 2009, p. 34, Hoffer, 2011, pp. 98～99
- (97) Porter, 2000, chapters 1, 7.
- (98) Porter, 2000, chapter 4.
- (99) *Autobiography*, p. 97, 『自伝』 82 頁。
- (100) Porter, 2000, pp. 34～37.
- (101) Shields, 2008.
- (102) Pencac, 2011, p. 278.
- (103) *Autobiography*, p. 164, 『自伝』 179～180 頁。「空の袋は真っ直ぐには立ち難い」というのは、その後

- の説明でわかるとおり、『管子』中の「衣食足りて礼節を知る」と全く同じ意味である。
- (104) Lemay, 2006, vol.2, pp. 193~199.
- (105) Lemay, 2006, vol.2, pp. 200~205.
- (106) Lemay, 2006, vol.2, pp. 200~210.
- (107) 『自伝』の付録として、その末尾に訳出されている。
- (108) *Autobiography*, p. 149, 『自伝』158頁。
- (109) Lemay, 2006, vol. 3, pp. 578~579を参照せよ。
- (110) Pencak, 2011, p. 282.
- (111) *Autobiography*, p. 149, 『自伝』158頁。
- (112) ウッド, 2010, 45~54頁; Waldstreicher, 2011
- (113) Lemay, 2006, vol. 3, pp. 576~577
- (114) Pencak, 2011, p. 282.
- (115) *Autobiography*, pp. 241~246, 『自伝』282~288頁。
- (116) 『著作集』168~172, 178~182, 182~184頁。なお、フランクリンの経済理論およびその学説市場の位置づけについては、久保芳和, 1757を参照せよ。
- (117) 『著作集』121~129, 129~135頁。
- (118) 『著作集』270~272, 114~120, 138~141頁。フランクリンは、フランス滞在中に啓蒙精神あふれるフィロゾーフたちに触発されて、奴隷制反対論者になった。1775年にペンシルヴェニアのクエイカー教徒は北アメリカで最初の奴隷制廃止論者のグループを結成した。フランクリンは帰国後、この「奴隷制廃止と不法に奴隷にされた黒人の救済促進協会」の会員となって活躍した。彼は、奴隷制を根絶するだけでなく、「自由を回復した人々が、市民的自由を行使し享受できるようにする責任が、我われにはある」と説いた(ウッド, 2010, 276~279頁)。
- (119) *Autobiography*, pp. 181~185, 『自伝』203~207頁。
- (120) *Autobiography*, pp. 174~175, 181~182, 『自伝』193~194, 203~204頁。
- (121) 『著作集』144~146, 186~194, 191~194頁。
- (122) *Autobiography*, pp. 116~117, 『自伝』112頁。
- (123) (124) *Papers*, vol. 1, pp. 255~259; 103 *Writings*, 205~207, 『著作集』34~36頁。フランクリンは『自伝』の中では、「ジャントー」の会則をその設立時に作ったように述べているが、それは現存しない。現存しているのは1732年に書かれたものであって、しかも、それは内容的に不完全である。
- (125) Horne, 1993, pp. 425~430; 梅津, 1999, 146~151頁。
- (126) Daniel Defoe, 1697, *An Essay upon Projects*, London, reprinted in 1999, by AMS Press; 梅津, 1999, 137~145頁。
- (127) John Locke, 1720, *Collection of Several Pieces*, London. 現在これは, *The Works of John Locke*. New edition, corrected. In ten volumes. Vol. 10, London, 1823, reprinted by Scientia Verlag Aalen, Germany, 1963で読むことができる。
- (128) Lemay, 2006, Vol. 1, p. 333.
- (129) Walters, 1999, pp. 18~24.
- (130) Walters, 1999, pp. 24~25.
- (131) Jacob, 1997, p. 93.
- (132) Shields, 2008, p. 55.
- (133) Lemay, 2006, Vol. 1, p. 333.
- (134) *Autobiography*, pp. 170~171, 『自伝』188~189頁。
- (135) *Autobiography*, pp. 130~131, 141~143, 『自伝』131~132, 148~151頁。
- (136) *Autobiography*, pp. 192~195, 『自伝』219~222頁。
- (137) *Autobiography*, pp. 173~174, 『自伝』192~193頁。

- (138) *Autobiography*, pp. 174~175, 『自伝』 193~194 頁。  
 (139) *Autobiography*, pp. 182~185, 『自伝』 204~208 頁。  
 (140) *Autobiography*, pp. 199~201, 『自伝』 226~229 頁。  
 (141) *Autobiography*, pp. 202~207, 『自伝』 230~237 頁。  
 (142) *Autobiography*, p. 207, 『自伝』 237 頁。  
 (143) ウッド, 2010, 58 頁。  
 (144) Chapin, 2008, p. 69  
 (145) *Autobiography*, pp. 196, 241~246, 『自伝』 223, 282~288 頁; ウッド, 78~81 頁。  
 (146) Chapin, 2008, pp. 69~71; Laura Rigal, pp. 308~333; Hoffer, pp. 102~104; ウッド, 2010, 80 頁  
 (147) *Autobiography*, pp. 191~192, 『自伝』 217~218 頁。  
 (148) *Writings*, 1987, pp. 323~344; 『著作集』 44~51 頁。  
 (149) Mulford, 2008, p. 3.  
 (150) ウッド, 2010, 61 頁; *Writings*, 1987, pp. 348~354; 『アメリカ古典文庫 1』 51~56 頁。  
 (151) *Writings*, 1987, pp. 295~297; 『著作集』 39~41 頁。  
 (152) *Writings*, 1987, p. 296; 『著作集』 40 頁; Hayes, 2008, p. 14; Hoffer, 2011, p. 78  
 (153) Moky, 2009, p. 40.  
 (154) Porter, 2000, p. 22.  
 (155) さしあたり, 馬場, 山本, 広田, 須藤, 2012, 12 章を参照せよ。  
 (156) このような捉え方が可能であることについては, ヴェーバー自身が認めている。ヴェーバー, 1989, 81~82 頁。

#### 参考文献

- D. H. Lawrence, 1923, *Studies in Classic American Literature*,  
 Carl van Doren, 1938, *Benjamin Franklin*, 1965, The Viking Press  
 久保芳和, 1957, 『フランクリン研究: その経済思想を中心として』 関書院  
 B・フランクリン, 1957, 『フランクリン自伝』 松本慎一・西川正身訳, 岩波書店 (文庫)  
 Benjamin Franklin, 1959~, *The Papers of Benjamin Franklin*, eds. by L. W. Labaree, et.al., Yale University Press  
 Benjamin Franklin, 1964, *The Autobiography of Benjamin Franklin*, ed. by L. W. Labaree, Yale University Press  
 Peter Gay, 1966, *The Enlightenment: an interpretation, vol. 1, the rise of modern paganism*, 1975, Alfred A. Knopf  
 A. O. Aldridge, 1967, *Benjamin Franklin and Nature's God*, Duke University Press, Durham, North Carolina  
 Peter Gay, 1969, *The Enlightenment: an interpretation, vol. 2, the science of freedom*, 1975, Alfred A. Knopf  
 B・フランクリン, 1975, 『アメリカ古典文庫 1: ベンジャミン・フランクリン』 池田孝一訳, 亀井俊介解説, 研究社出版  
 Lemay, A. Leo, ed., 1987, *Benjamin Franklin, Writings*, Library Classics of the United States, Inc. New York  
 M・ヴェーバー, 1989, 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』 大塚久雄訳, 岩波書店 (文庫)  
 寺崎宣昭, 1992, 『アメリカ資本主義の精神と構造: 中部大西洋岸地域の研究を通して』 国学院大学栃木短期大学  
 J. A. L. Lemay, ed., *Reappraising Benjamin Franklin: a bicentenary perspective*. U. of Delaware Press, Newark, Delaware, US, 1993

- O. Aldridge, 1993, 'The Alleged Puritanism of Benjamin Franklin' in J. A. L. Lemay, ed.
- J. N. Green, 1993, 'Benjamin Franklin as Publisher and Bookseller' in J. A. L. Lemay, ed.
- J. C. van Horne, 1993, 'Collective Benevolence and the Common Good in Franklin's Philanthropy', in J. A. L. Lemay, ed.
- Dorinda Outram, 1995, *The Enlightenment*, Cambridge U. P.
- 田村光三, 1995, 『ニュー・イングランド社会経済史研究』勁草書房
- R. E. Schofield, 1997, *The Enlightenment of Joseph Priestley: a study of his life and work from 1733 to 1773*, The Pennsylvania State University Press
- R. A. Ferguson, 1997, *The American Enlightenment, 1750~1820*, Harvard Univ. Press
- D. Anderson, 1977, *The Radical Enlightenment of Benjamin Franklin*, Baltimore, Md. US,
- Margaret Jacob, 1997, *Scientific Culture and the Making of the West*, Oxford University Press.
- D・H・ロレンス, 1999, 『アメリカ古典文学論』大西直樹訳, 講談社(文芸文庫), 第二章
- 梅津順一, 1999, 「フランクリン・デフォー・マザー: 中産層とアソシエーションの構想」関口尚志・梅津順一・道重一郎『中産層文化と近代: ダニエル・デフォーの世界から』日本経済評論社
- K. S. Walters, 1999, *Benjamin Franklin and his Gods*, University of Illinois Press
- Roy Porter, 2000, *The Creation of the Modern World: the untold story of the British enlightenment*, W. W. Norton & company
- Douglas Anderson, 2000, *The Radical Enlightenment of Benjamin Franklin*, John Hopkins University Press
- 渡辺喜七, 2000, 『アメリカの工業化と経営理念』日本経済評論社
- Joel Mokyr, 2002, *The Gifts of Athena: historical origins of knowledge economy*, Princeton U. Press.
- W. Isaacson, 2003, *Benjamin Franklin: an American life*, Simon and Schuster
- Alan Houston, 2008, *Benjamin Franklin and the Politics of Improvement*, Yale U. Press
- Carla Mulford ed., 2008, *The Cambridge Companion to Benjamin Franklin*, Cambridge University Press
- K. J. Hayes, 2008, 'Benjamin Franklin's Library' in Carla Mulford ed.
- D. Anderson, 2008, 'The Art of Virtue' in Carla Mulford ed.
- D. S. Shields, 2008, 'Franklin in the Republic of Letters', in Carla Mulford ed.
- J. E. Chapin, 2008, 'Benjamin Franklin's Natural Philosophy' in Carla Mulford ed.
- F. Kelleter, 2008, 'Franklin and the Enlightenment' in Carla Mulford ed.
- K. Walters, 2008, 'Franklin and the Question of Religion' in Carla Mulford ed.
- J. Campbell, 2008, 'The Pragmatist in Franklin' in Carla Mulford ed.
- W. J. Moses, 2008, 'Protestant ethic or conspicuous consumption? Benjamin Franklin and the Gilded Age' in Carla Mulford ed.
- S. C. Arch, 2008, 'Benjamin Franklin's Autobiography, then and now' in C. Mulford ed.
- J. A. Leo Lemay, 2009, *The Life of Benjamin Franklin*, 3vols. University of Pennsylvania Press
- Mokyr, 2009, *The Enlightened Economy: an economic history of Britain 1700~1850*, Yale University Press, New Haven, U.S.
- 梅津順一, 2009, 「フランクリンの印刷所経営」『青山総合文化政策学』第1巻第1号
- 梅津順一, 2010, 「ニュー・イングランド植民地における市民契約」『青山総合文化政策学』第2巻第1号
- ゴードン・S・ウッド, 2010, 『ベンジャミン・フランクリン, アメリカ人になる』池田年穂・金井光太郎・肥後本芳男訳, 慶應義塾大学出版会
- 山本通, 2010, 「アングリカン広教主義における科学と社会—ジェイコブ・テーゼをめぐって—」『商経論叢』第45巻4号
- 梅津順一, 2011, 「社会企業家フランクリン」『青山総合文化政策学』第3巻第1号
- P. C. Hoffer, 2011, *When Benjamin Franklin met the Reverend Whitefield*, The John Hopkins U. P., Baltimore

- D. Waldstreicher ed., 2011, *A Companion to Benjamin Franklin*, Wiley-Blackwell, Chechester, U. K.
- K. Dierks, 2011, 'Benjamin Franklin and Colonial Society' in D. Waldstreicher ed.
- John Fea, 2011, 'Benjamin Franklin and Religion' in D. Waldstreicher ed.
- D. Waldstreicher, 2011, 'Benjamin Franklin, Capitalism and Slavery' in Waldstreicher
- O. Seavey, 2011, 'The Manners and Situation of a Rising People: Reading Franklin's Autobiography' in D. Waldstreicher ed.
- W. Pencak, 2011, 'Poor Richard's Almanac' in D. Waldstreicher ed.
- L. Rigal, 2011, 'Benjamin Franklin, the Science of Flow, and the Legacy of the Enlightenment' in Waldstreicher ed.
- A. Koschnik, 2011, 'Benjamin Franklin, Associations, and Civil Society' in Waldstreicher
- P. E. Kerry and M. S. Holland ed., 2012, *Benjamin Franklin's Intellectual World*, Fairleigh Dickinson university Press, ML, U.S.
- K. J. Hayes and I. Bour, eds., 2011, *Franklin in his own Time*, University of Iowa Press, Iowa City, U.S.
- Michael Zuckerman, 2012, 'Franklin's Masks: a play upon possibility', in Kerry and Holland ed.
- Jerry Weinberger, 2012, 'Benjamin Franklin Unmasked', in in Kerry and Holland ed.
- 梅津順一, 2012(a), 「アメリカにおけるキリスト教大学と世俗化—歴史的素描」『青山総合文化政策学』第4巻第1号
- 梅津順一, 2012(b), 「フランクリンと『徳の技法』」『青山総合文化政策学』第4巻第2号
- 山本通, 2012, 「産業革命の知的起源:『科学的文化』と『産業的啓蒙主義』」『商経論叢』第48巻第1号
- 馬場哲, 山本通, 広田功, 須藤功, 2012, 『エレメンタル欧米経済史』見洋書房